福岡市埋蔵文化財調査報告書　第459集

箱崎遺跡 4

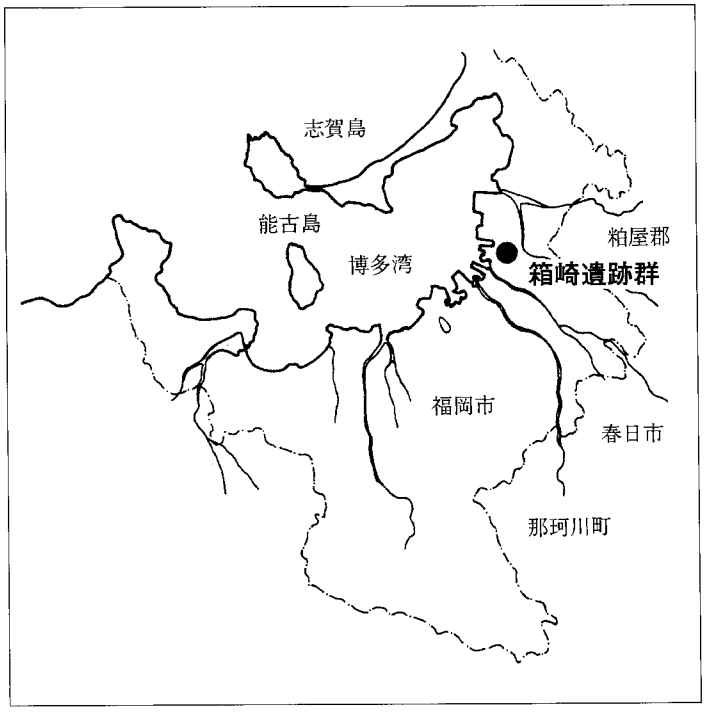
－箱崎遺跡群第６次・７次調査報告－

１９９６
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第459集

箱崎遺跡 4

―箱崎遺跡群第６次・７次調査報告―



遺跡調査番号　9445、9448
遺跡番号　HKZ-6、7

1996
福岡市教育委員会

序

箱崎地区の市街地の地下には、博多とともに対外交渉の窓口として日本の歴史の上で特異な発展を遂げた中世都市が包蔵されています。

近年、九州大学の移転とも関連して、筥崎宮門前の街並みの再開発が活発化し高層ビル化が進んでいます。

本書は民間開発に先立って行われた第６次、第７次調査の報告であります。調査の結果、中世から近世にかけての遺構、遺物が発見されました。本書が埋蔵文化財の理解と認識を深める一助となり、研究資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理、本書発行まで費用負担をはじめ、多くのご協力を賜った株式会社第一双葉、ダイア建設株式会社をはじめとする関係者各位に深甚なる謝意を表します。

平成８年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾　花　　剛

例　言

1．本書は、１９９４年度に行われた民間開発に伴い、福岡市教育委員会が調査を実施した箱崎遺跡群第６次、第７次調査の報告書である。各調査の担当は第６次調査が宮井善朗、第７次は加藤隆也である。

2．本書に使用した遺構の実測図は宮井、加藤、吹春憲治が作成し、藤川繁昌が補佐した。遺物の実測は宮井、加藤、西村智道が行った。製図は宮井、加藤、林由紀子、平野徳子が行った。

3．本書に使用した遺構、遺物の写真は宮井、加藤が撮影した。

4．第６次調査において検出した遺構について、調査時に遺構を示す記号Ｍを付して検出順に通し番号を付した。本書では、この番号からＭを除き、遺構の性格を示す用語を付して、溝１、土壙２のように記述する。また遺物挿図中の括弧内の番号は、収蔵時の登録番号である。第７次調査においては遺構の呼称は記号化し土坑（土壙）をＳＫ、溝をＳＤ、井戸をＳＥ、柱穴をＳＰ、用途不明遺構をＳＸとした。

5．本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。

6．本書の執筆は第１、２章は宮井、第３章は加藤が行った。また、第７次調査出土人骨については中橋孝博氏に分析報告を依頼した。編集は各担当者と協議して加藤が行った。

7．本報告に係るすべての出土遺物・記録類（図面・写真・スライドなど）は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

本　文　目　次

第１章　箱崎遺跡の概要 …… （宮井善朗） 1
第２章　第６次調査の記録 …… （宮井善朗） 5
Ⅰ．はじめに …… 5
１．調査に至る経緯 …… 5
２．調査体制 …… 5
Ⅱ．調査の記録 …… 7
１．概要 …… 7
２．検出遺構 …… 7
３．出土遺物 …… 12
４．小結 …… 20
第３章　第７次調査の記録 …… （加藤隆也） 21
Ⅰ．はじめに …… 21
１．調査に至る経過 …… 21
２．調査体制 …… 22
Ⅱ．調査の記録 …… 22
１．概要 …… 22
２．検出遺構 …… 24
（１）井戸（ＳＥ） …… 24
（２）遺物包含層 …… 29
（３）土坑、土壙（ＳＫ） …… 30
（４）柱穴（ＳＰ） …… 32
３．小結 …… 32
Ⅲ．福岡市箱崎遺跡群第７次調査出土の中世人骨 …… （中橋孝博） 33

挿　図　目　次

Ｆｉｇ．１　箱崎遺跡と周辺の遺跡（1/25,000） …… 2
Ｆｉｇ．２　調査地点図（1/4,000） …… 4
Ｆｉｇ．３　第６次調査区位置図（1/500） …… 6
Ｆｉｇ．４　遺構配置図（1/150） …… 8
Ｆｉｇ．５　各遺構実測図（1/30） …… 9
Ｆｉｇ．６　検出遺構実測図２（井戸107、土壙108）（1/40） …… 10
Ｆｉｇ．７　検出遺構実測図３（1/40） …… 11
Ｆｉｇ．８　出土遺物１（土壙34、土壙42）（1/3） …… 12
Ｆｉｇ．９　出土遺物２（井戸107）（1/3） …… 13

Ｆｉｇ.10　出土遺物３（井戸１２０－１）（1/3）……15
Ｆｉｇ.11　出土遺物４（井戸１２０－２）（1/3）……16
Ｆｉｇ.12　出土遺物５（1/3）……17
Ｆｉｇ.13　各遺構　出土石製品（1/2、1/3）……19
Ｆｉｇ.14　第７次調査地点(1/1000)……21
Ｆｉｇ.15　第１面、第２面遺構配置図(1/100)……23
Ｆｉｇ.16　試掘トレンチ土層断面（1/80）……24
Ｆｉｇ.17　ＳＥ－01,02実測図（1/40）……25
Ｆｉｇ.18　ＳＥ－03,04,05実測図（1/40）……26
Ｆｉｇ.19　井戸出土遺物（1/2,1/3,1/4）……27
Ｆｉｇ.20　包含層出土遺物（1/1,1/2,1/3）……29
Ｆｉｇ.21　ＳＫ、ＳＰ実測図（1/40）……30
Ｆｉｇ.22　ＳＫ－04出土遺物（1/2,1/3）……31
Ｆｉｇ.23　ＳＰ出土遺物（1/3,1/4）……31

図　版　目　次

ＰＬ．１　１）第６次調査区東半区（南から）　２）西半区（南から）
ＰＬ．２　１）溝１下層（東から）　２）溝２下層（南から）
ＰＬ．３　１）土壙１８（西から）　２）土壙２５（西から）
ＰＬ．４　１）土壙３４（北から）　２）土壙４２（東から）
ＰＬ．５　１）井戸１０７土層（西から）　２）井戸１０７（東から）
ＰＬ．６　１）井戸１２０（西から）　２）井戸１２０井筒（西から）
ＰＬ．７　１）土壙１０８（西から）　２）出土遺物１
ＰＬ．８　１）出土遺物２
ＰＬ．９　１）７次第１面検出状況（南西から）　２）７次第２面調査区全景（南西から）
ＰＬ.10　１）ＳＫ－０１人骨出土状況（南東から）　２）人骨取り上げ後残存状況
ＰＬ.11　１）ＳＥ-０１、ＳＫ-０１掘削状況(南東から)　２）ＳＥ－０２完掘状況（北西から）
３）ＳＥ－０３完掘状況（北西から）　４）ＳＥ－０４、０５完掘状況（南東から）
５）ＳＫ－０４遺物出土状況（北西から）　６）ＳＰ－２１遺物出土状況（南西から）
ＰＬ.12　出土遺物

第１章　箱崎遺跡の概要

箱崎遺跡は御笠川と宇美川にはさまれ、海岸に沿ってほぼ南北に伸びる砂丘上に立地する。この砂丘上には南側に吉塚遺跡、堅粕遺跡、吉塚本町遺跡等が知られており、それぞれ砂丘上の微高地に立地している。各遺跡群の境界は調査地点が少ないため確認できないが、後背湿地や砂丘鞍部によって画されているものと考えられる。この遺跡の配列や県庁、地下鉄建設時の試掘成果、また箱崎遺跡群の調査、試掘成果等から考えると、特に箱崎遺跡の乗る砂丘では、砂丘の頂部はかつて考えられていた大学通りの方向より、若干北側へ触れ、更に南北方向に近づくのではないかと考えられる。例えば遺跡南端では妙見通り沿いの２次調査区は砂丘砂が遺構面となり、更に東側に遺跡が拡大する可能性は強いが、北端の６次調査区は２次調査区より大学通りに近いが、遺構面はおそらく宇美川の堆積による砂であり、砂丘の東側縁辺部と考えられる。また筥崎宮本殿の本来の位置が現位置と大きく異ならないとすれば、大学通りを砂丘最高部と考えるとその背後に建立したことになる。通有の神社のごとく南面して立てられるならともかく、異賊降伏を祈願して北面して立てられた筥崎宮の性格を考えると、本殿の位置こそ砂丘の頂部にふさわしいように思える。そうすると南側では砂丘の頂部は従来より東に、北側では西に触れる可能性が高いと考えられる。このことは遺跡の範囲に関ることであり、今後の開発に関る審査の参考になれば幸いである。

この砂丘上の他の遺跡では吉塚遺跡や堅粕遺跡では弥生時代から集落が見られ、古墳時代では堅粕遺跡で前期の方形周溝墓が検出されている。古代では吉塚本町遺跡、堅粕遺跡で集落が見られる。特に堅粕遺跡では、越州窯系青磁や墨書土器、緑釉陶器などが出土しており、なんらかの公的施設の存在の可能性も指摘されている。

箱崎遺跡では現在までに７次の調査が行われている。それぞれの調査成果については総括的に後述するとして、調査地点と、調査原因に付いてのみ列記しておく。

第１次調査（馬出２丁目、５丁目地内）遺跡の南西端に近い地点である。地下鉄建設に伴う調査。1983年調査。1988年報告。市報193 集。

第２次調査（箱崎１丁目18-32 外）箱崎宮に南接する地点。福岡県粕屋総合庁舎建設に伴い、県教育委員会による調査。1986年調査。1987年報告。県報79集。

第３次調査（箱崎１丁目2731-1、4 ）大学通りに面する遺跡の中央部。マンション建設に伴う調査である。1990年調査。1992年報告。市報262 集。

第４次調査（箱崎１丁目2761）筥崎宮の境内。放生池掘削の際に瓦経が出土。1990年調査。

第５次調査（箱崎１丁目25、27）３次調査に近く、大学通りに面する遺跡の中央部。マンション建設に伴う調査である。。1991年調査。1992年報告。市報273集。

第６次調査（箱崎３丁目8-31）今回報告。遺跡の北端に近い地点である。

第７次調査（箱崎１丁目）今回報告。遺跡の中央部である。

箱崎遺跡では古代後期頃から遺構が散見しはじめる。現在遺物として最も時期的に遡るものは今回報告の６次調査で出土した、縄文時代晩期から弥生時代初頭に属すると考えられる石斧であるが、これは本編で報告するとおり、この遺物は中世（12世紀後半頃）と考えられる一括遺物と共に出土しており、該期に廃棄されたことは明らかなので、該期に発見されて廃棄される過程が不明であり、箱崎遺跡で縄文時代から弥生時代に至る時期に生活が営まれていたかについては全く確証はないといえよう。また古墳時代、奈良時代に属する遺物も現在まで知られていない。

さて箱崎遺跡は筥崎宮を抜きにしては語れないであろう。筥崎宮は921年（延喜21年）大宰府観世

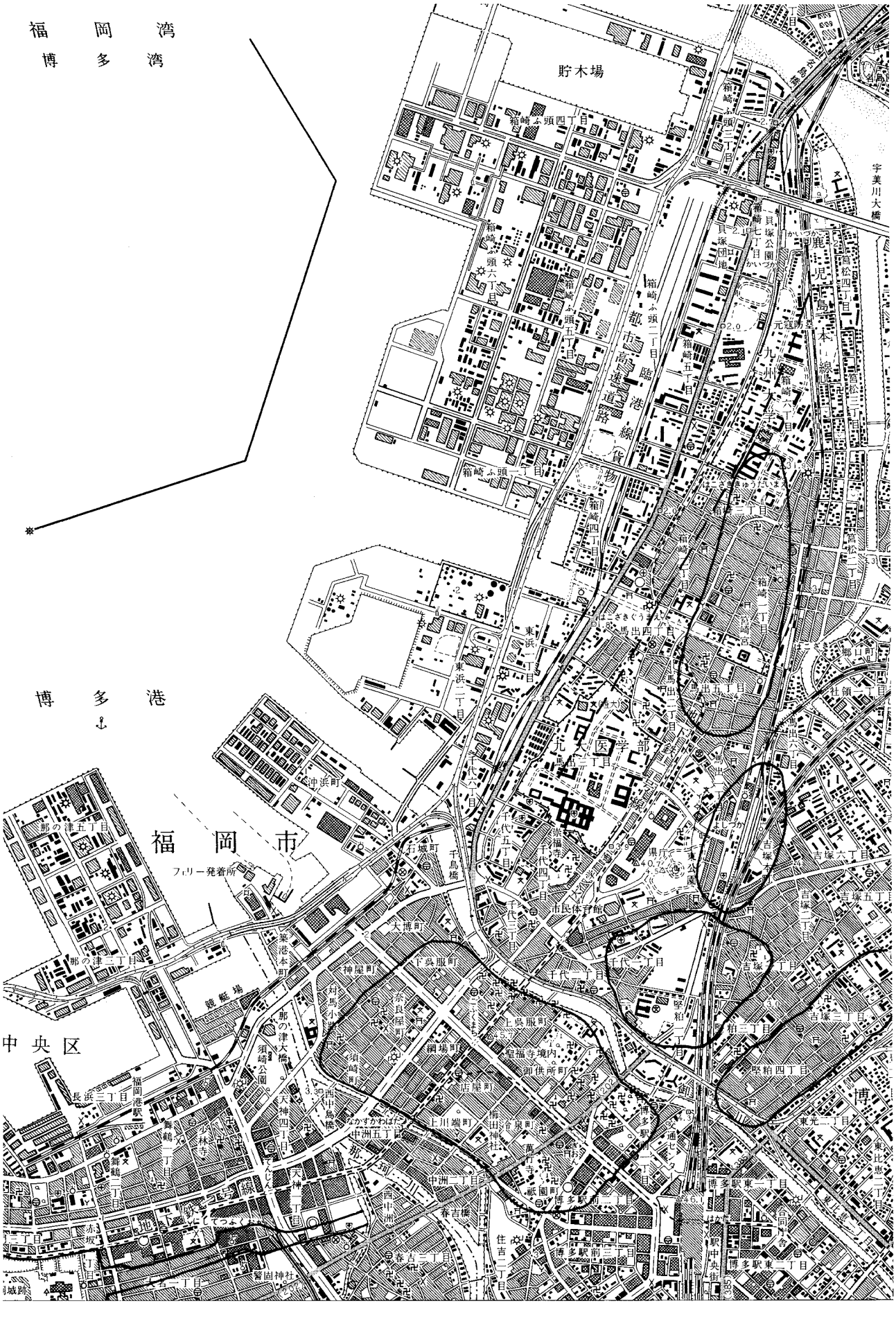


Fig. 1　箱崎遺跡と周辺の遺跡

音寺の巫女橘滋子に八幡大菩薩の託宣があり、二年後の923 年（延長３年）に穂波郡の大分宮を遷座、創建したものと伝えられている。創建時に近い遺構としては２次調査で10世紀後半代の溝が検出されている程度で、極めて僅少である。遺物としても各調査地点で最も古い建物は11世紀代に下がるところが多い。12世紀に入ると各地点で遺構が増加する。遺構としては土壙が多い。筥崎宮周辺から遺跡の中央部にかけて12世紀の後半代に一時的に遺構が減少するようである。２次調査では10、11世紀代の遺構の他はほとんど13世紀後半以降の遺構であるし、１次調査でも13世紀以降に遺構が増加する。３次調査では11世紀末から12世紀中頃にかけて遺構が増加し、12世紀後半から13世紀にかけて遺構が減少すると報告されている。1151年（仁平元年）に大宰府官人による筥崎、博多の大追捕があり、筥崎宮にも乱入するという事件と関りがあるのであろうか。ただし、北端の６次調査では中世遺構は12世紀後半から13世紀前半頃のものしか見られない。

13世紀代に入って箱崎を見舞う大事件といえば文永の役（1274年、文永11年）、弘安の役（1281年、弘安４年）の二度にわたる元寇であろう。文永の役の際には博多から箱崎にかけても戦場となり筥崎宮も焼失している。２次調査では焼土や灰を含む厚い整地層が検出されており、13世紀中頃から後半代の遺物が多量に出土している。この層が元寇による焼失後の整地と考えられている。焼土を含む層は５次調査でも検出されている。

14世紀末から15世紀頃からは、各調査地点で再び遺構、遺物とも増加する。１次調査の所見では、該期から定形化した集落が形成されはじめるという。それ以前の散漫な分布に対し、明確な占用区分が見られ、その町割が近現代まで継続されている。この頃筥崎宮の門前町あるいは街道沿いの商家街が形成されていくと考えられている。ただ北端の６次調査区ではその後近世まで遺構、遺物とも見られず、近世以前はこの門前町の範囲からは外れていた可能性も考えられる。

近世遺構はどの調査区でも見られ、遺物も大量に出土する。幾度も焼失を繰り返した筥崎宮も1546年（天文15年）に大内義隆により再建され、現在に至っている。

（参考文献）

１次調査　「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅷ　博多　高速鉄道関係調査（４）」福岡市埋蔵文化財調査報告書第193 集　1988　福岡市教育委員会

２次調査　「箱崎遺跡　福岡市東区箱崎１丁目所在遺跡の調査」福岡県文化財調査報告書第79集　1987　福岡県教育委員会

３次調査　「箱崎遺跡２　箱崎遺跡群第３次調査の報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第262 集　1991　福岡市教育委員会

４次調査　「福岡市埋蔵文化財年報Vol. 4　1989年度」1991　福岡市教育委員会

５次調査　「箱崎３　箱崎遺跡群第５次調査の報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第273 集　1992　福岡市教育委員会

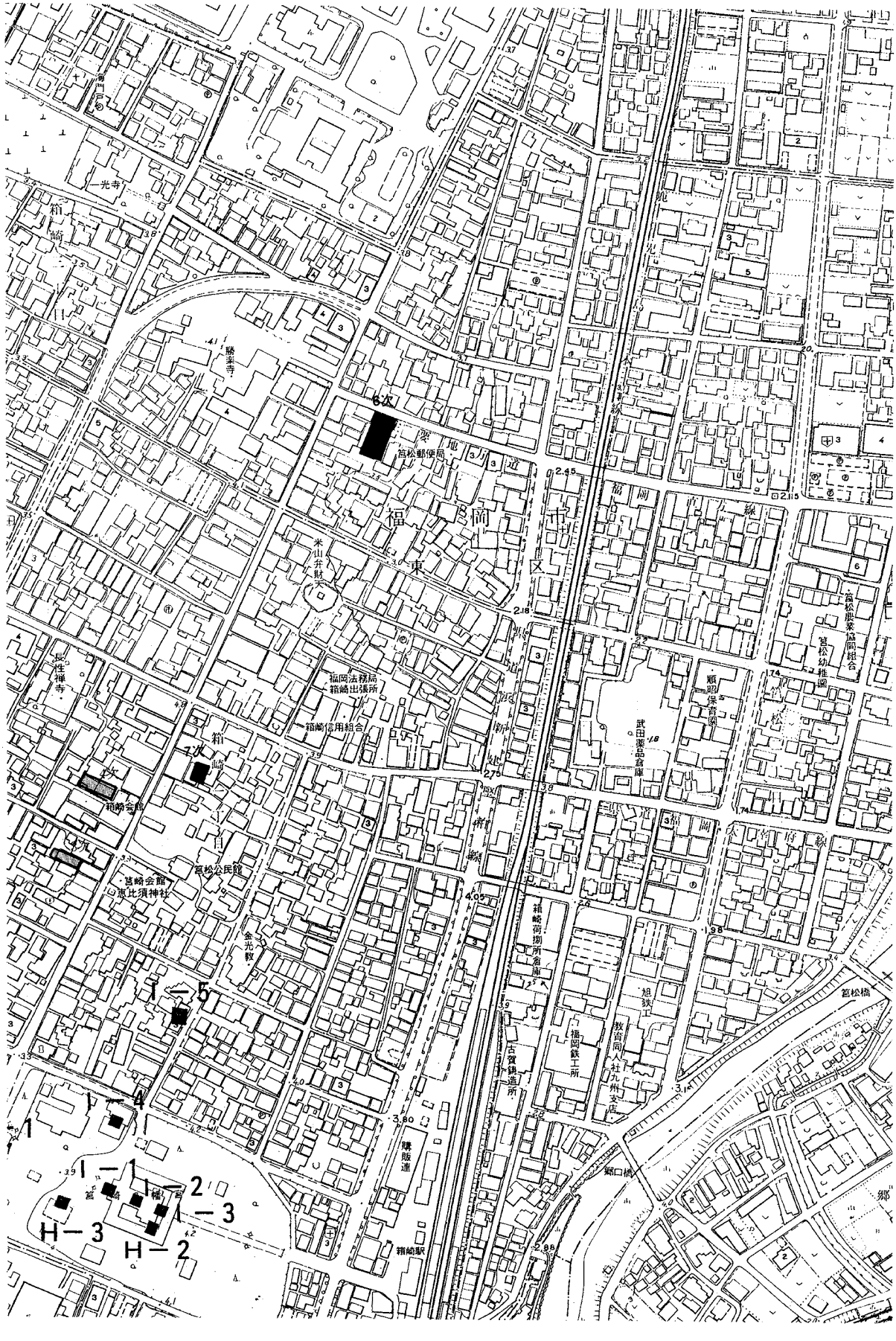

一光寺
箱崎
勝楽寺
6次
筥松郵便局
福岡市
東区
米山弁財天
福岡法務局
箱崎出張所
箱崎信用組合
長性禅寺
箱崎
7次
箱崎会館
4次
筥崎会館
筥松公民館
恵比須神社
金光教
I－5
I－4
I－1
I－2
I－3
H－3
H－2
箱崎駅
購販連
箱崎荷捌所倉庫
古賀鍛造所
福岡鉄工所
旭鉄工
教育同人社九州支店
郷口橋
筥松橋
武田薬品倉庫
順昭保育園
筥松幼稚園
筥松農業協同組合
福岡線
郷

Fig. 2　調査地点図

第二章　第６次調査

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

1991年９月４日付けで、株式会社第一双葉より、共同住宅建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地は箱崎遺跡群内に位置しており、埋蔵文化財課では審査願いを受けて９月11日に試掘調査を行なった。その結果申請地内にはピット、土壙などの遺構と土師器、陶磁器などの遺物が出土した。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、株式会社第一双葉との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなり、1994年10月20日に着手し、１月31日に終了した。

２．調査体制

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花　剛

調査総括　埋蔵文化財課　課長　折尾学（調査年度）　荒巻輝勝（整理年度）　第２係長　山崎純男（調査年度）　山口譲治（整理年度）

調査庶務　埋蔵文化財課第１係　吉田麻由美（調査年度）　西田結香（整理年度）

調査担当　埋蔵文化財課第２係　宮井善朗

調査作業　野村道夫　太田正顕　田原房五郎　楠林司朗　吉田米男　吹春憲治　藤川繁昌　江下和彦　森田祐子　古賀典子　持丸玲子　吉田恭子　森園弘子　平田浩美　谷口美由紀　水町志保　森田めぐみ　田中花子

整理補助　西村智道

整理作業　大石加代子　林由紀子　太田順子

また調査時には福岡市教育委員会の山崎純男氏、山口譲治氏をはじめとする先輩、同僚諸氏からも多くの助言をいただいた。深く感謝すると共に、本報告書に十分活かしきれなかったことをお詫びしたい。

遺跡調査番号	９４４５		遺跡略号　ＨＫＺ－６		
調査地地番	福岡市東区箱崎３丁目８－31				
開発面積	621㎡	調査対象面積	621㎡	調査面積	430㎡
調査期間	1994年10月13日～１月31日		分布地図番号	34-Ａ-1	

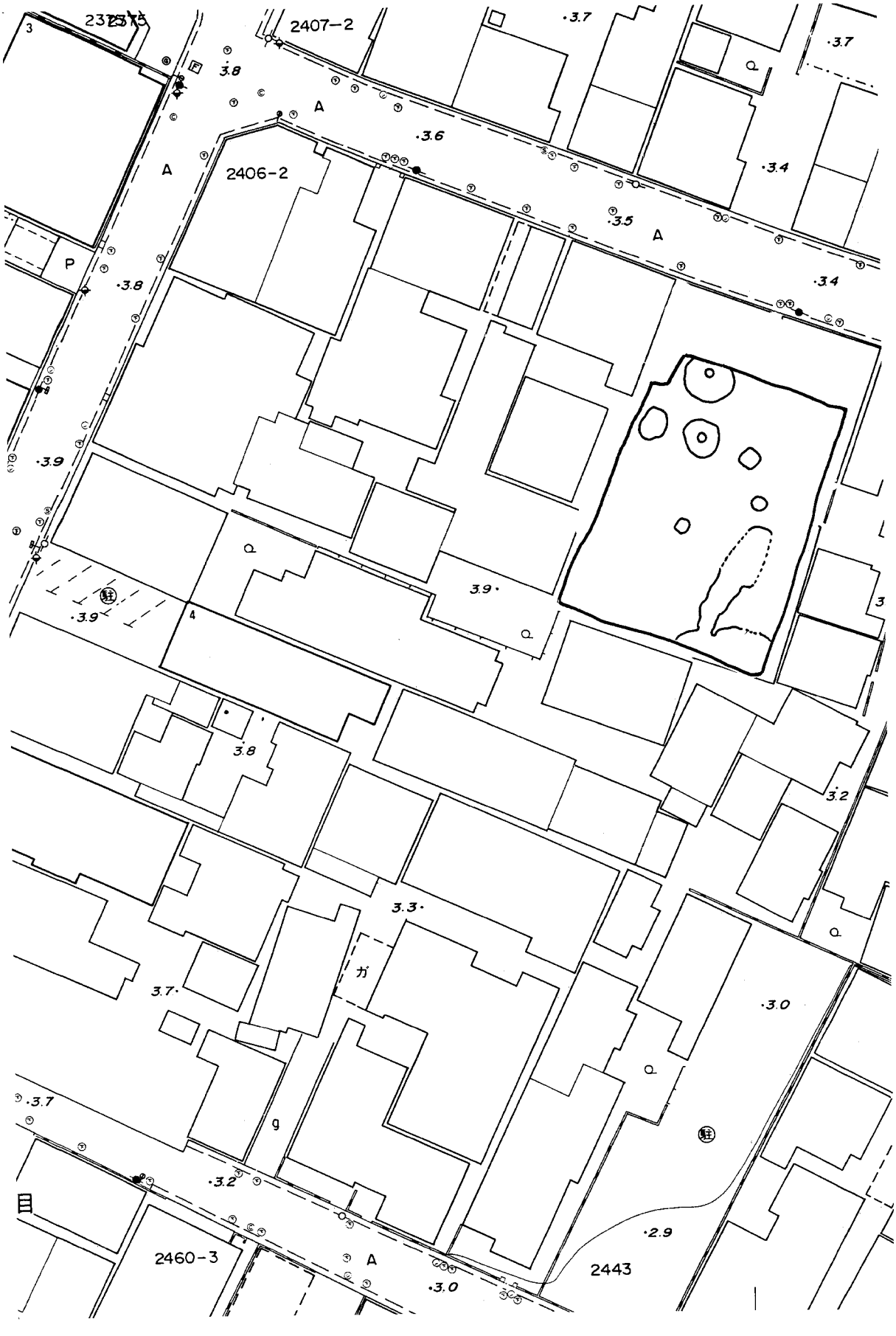


Fig. 3　第 6 次調査区位置図

Ⅱ　調査の記録

1．概要

第６次調査地点は砂丘の縁辺に近い位置と思われ、遺構面は風成砂ではない。宇美川の河口近くの南岸に位置することから宇美川による堆積砂と考えられる。調査地点は、近現代の攪乱が多く、また調査区中央付近に大形の溝状を呈する近世遺構があり、遺跡の性格や、変遷については不明な点が多い。中世の遺構としては井戸、土壙などがあり、中世前半期頃から集落が形成されていたようである。近世遺構には他に井戸、土壙などがある。出土遺物は総量でコンテナ23箱である。中世遺物には土師器、中国陶磁器、などがあり、石鍋などの滑石製品も見られる。近世遺物には多量の国産陶磁器がある。この他土錘も相当量出土している。今回の報告では整理時間、紙幅の関係から、中世遺構、遺物を中心に報告する。近世遺構については、主なものに付いてのみに止めたい。

2．検出遺構

検出遺構のうち、中世遺構を中心に主なものに付いて述べる。個別の実測図を掲載していない遺構については、Fig. 4の各遺構配置図を参照されたい。

溝１　調査区の南端で検出した。東西方向の溝である。南側の肩は調査区外なので幅2.5 m以上になろう。北側に伸びる溝２とは、覆土の観察からは時期差は無く、同一溝の分岐と考えられる。検出面からの深さは20cmほどで床面には深さ20cmほどの浅い凹みがある。覆土中からは肥前系の陶磁器など、近世に属する遺物が多量に出土した。

溝２　調査区のやや東側で検出した。南北方向の溝である。前述したように、溝１とは時期差は無いようである。北側を現代の土壙で攪乱されるが、北端部は確認でき、溝１との合流点までの延長は10.5 mを測る。検出面からの深さは70cmほどである。溝１との合流点付近に遺物の集中する部分がある。磁器、陶器、土師器など近世に属する遺物が出土しているが、中世に属する土師皿もまとまって出土しており、溝２掘削時に中世遺構を破壊しているものと考えられる。

土壙18（Fig. 5）　調査区の東端で検出した。北側を攪乱で欠くが、楕円形を呈する土壙である。長径1.5 m、短径１mを測る。検出面からの深さは1.2 mを測る。床面からやや浮いた状態で、陶器の摺鉢、甕が出土した。いずれも近世の物である。

土壙25（Fig. 5）　調査区中央やや北側で検出した。隅丸方形を呈する土壙である。径1.6 mを測る。検出面からの深さは60cmを測る。床面からわずかに浮いた位置に、礫を円形に巡らせている。更に覆土中にも、礫や瓦片が多量に積められていた。近世に属する磁器、陶器、土師質土器などが出土している。

土壙34（Fig. 5）　調査区のほぼ中央で検出した。ほぼ方形を呈する。径1.2 mを測る。検出面からの深さ50cmを測る。南東隅に床面からかなり浮いた状態で、土師皿、中国製磁器、陶器、瓦器等がまとまって出土した。出土遺物からは12世紀後半～13世紀頃に比定できる。

土壙42（Fig. 5）　調査区のほぼ中央で検出した。三角形に近い円形を呈する。径0.7 cmを測る。検出面からの深さは50cmを測る。床面からやや浮いた状態で土師皿が出土している。この土師器から12～13世紀頃に比定できよう。

土壙44（Fig. 5）　溝２の北側で検出した。ほぼ円形を呈する土壙である。径1.3 mを測る。検出面からの深さ60cmを測る。出土遺物は小片のみで、時期を明らかにできないが、磁器片には中国製の青磁、白磁片を含み、肥前系の染付を含まないことから、中世に遡る可能性が高い。

井戸107（Fig. 6）　調査区北端近くで検出した。ほぼ円形を呈する井戸である。掘方の径は３mを測る。井筒は、土層で観察したかぎりでは径80cmを測る。井筒の構築材は検出されていないので、木

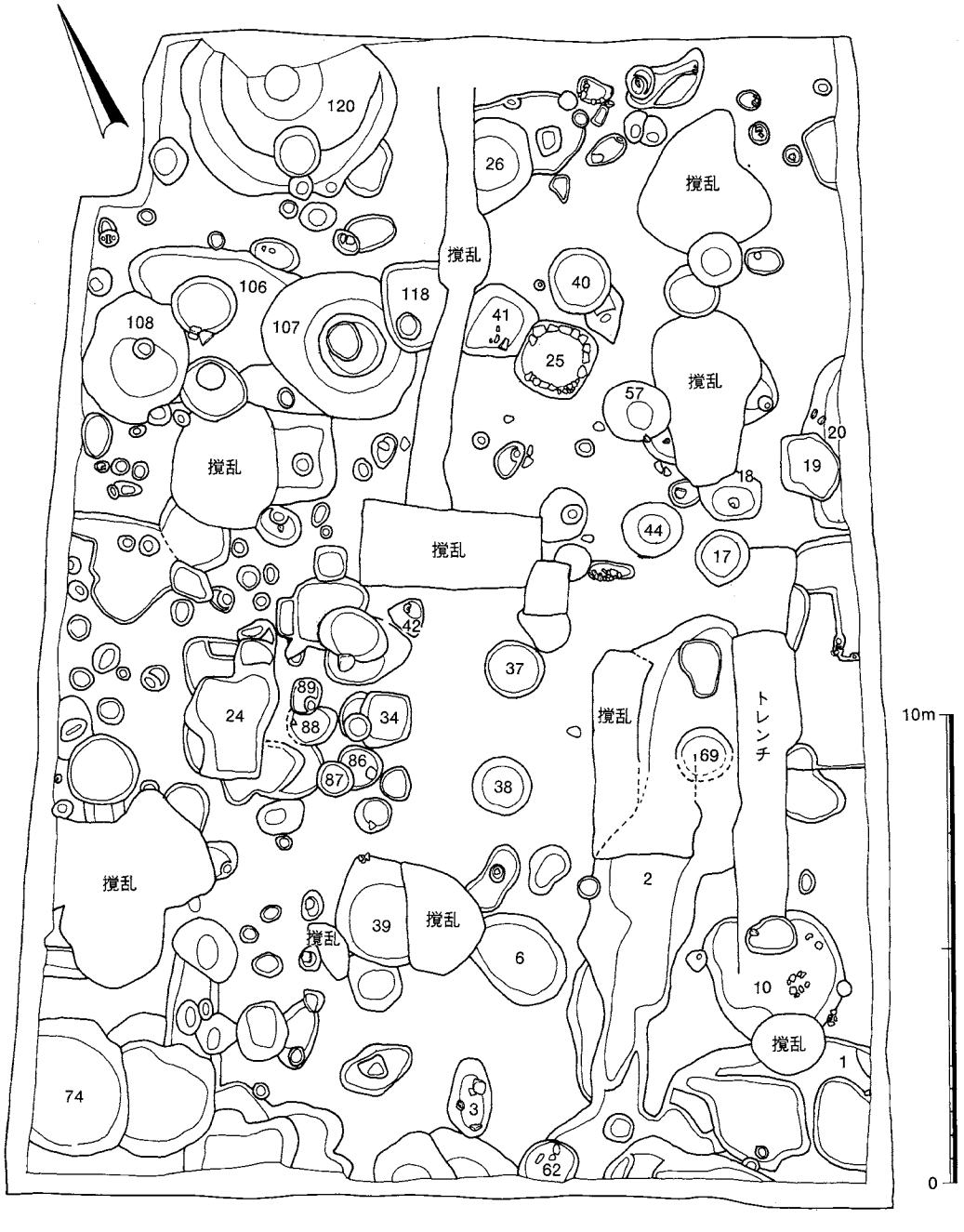


Fig. 4　遺構配置図（1：150）

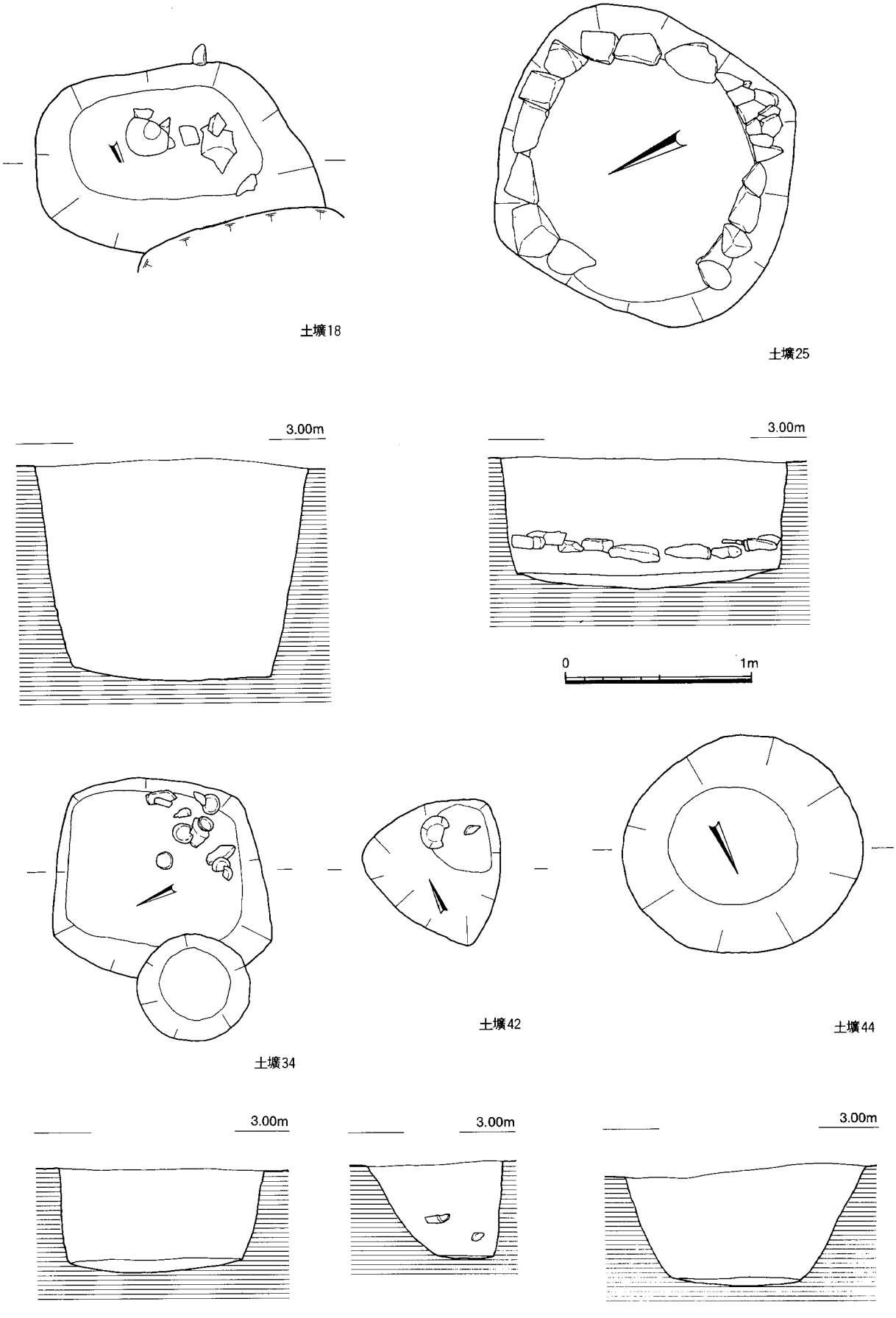


Fig. 5　検出遺構実測図（1：30）

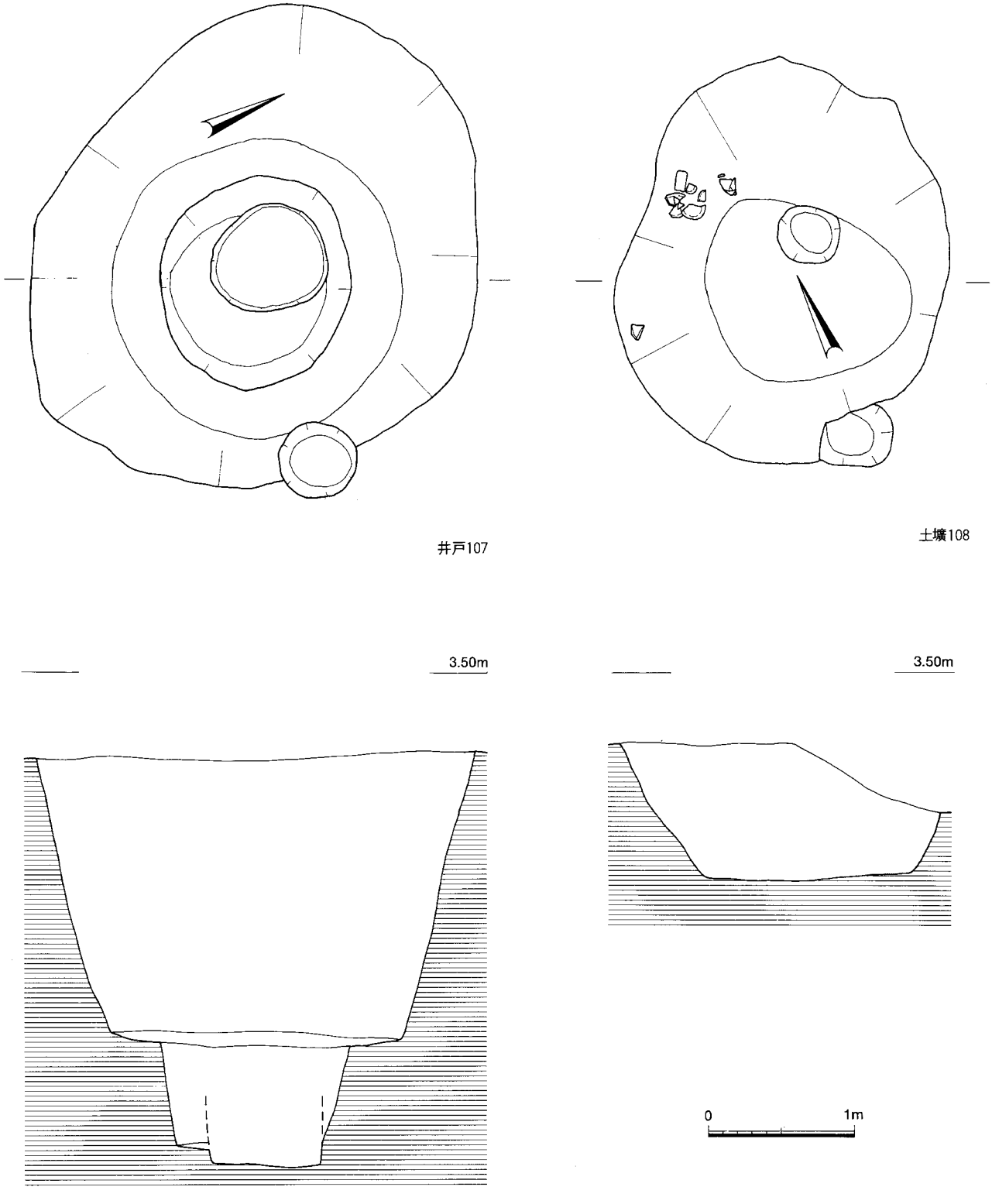
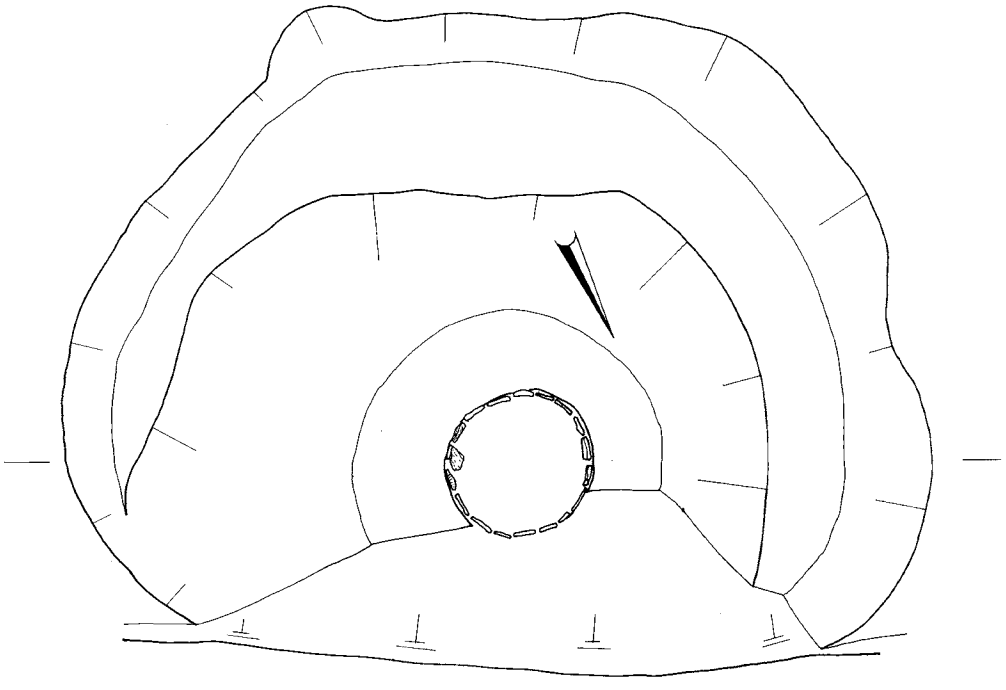


Fig. 6　検出遺構実測図２（井戸107　土壙108）（１：40）



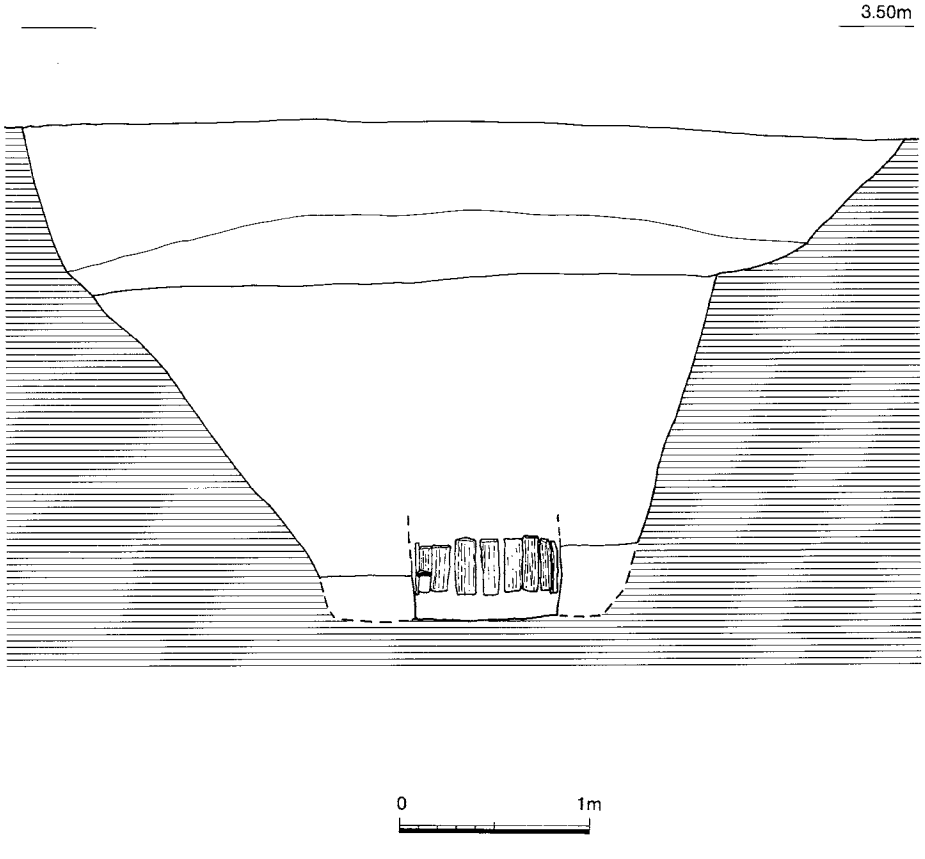


Fig. 7　検出遺構実測図（井戸120）（1：40）

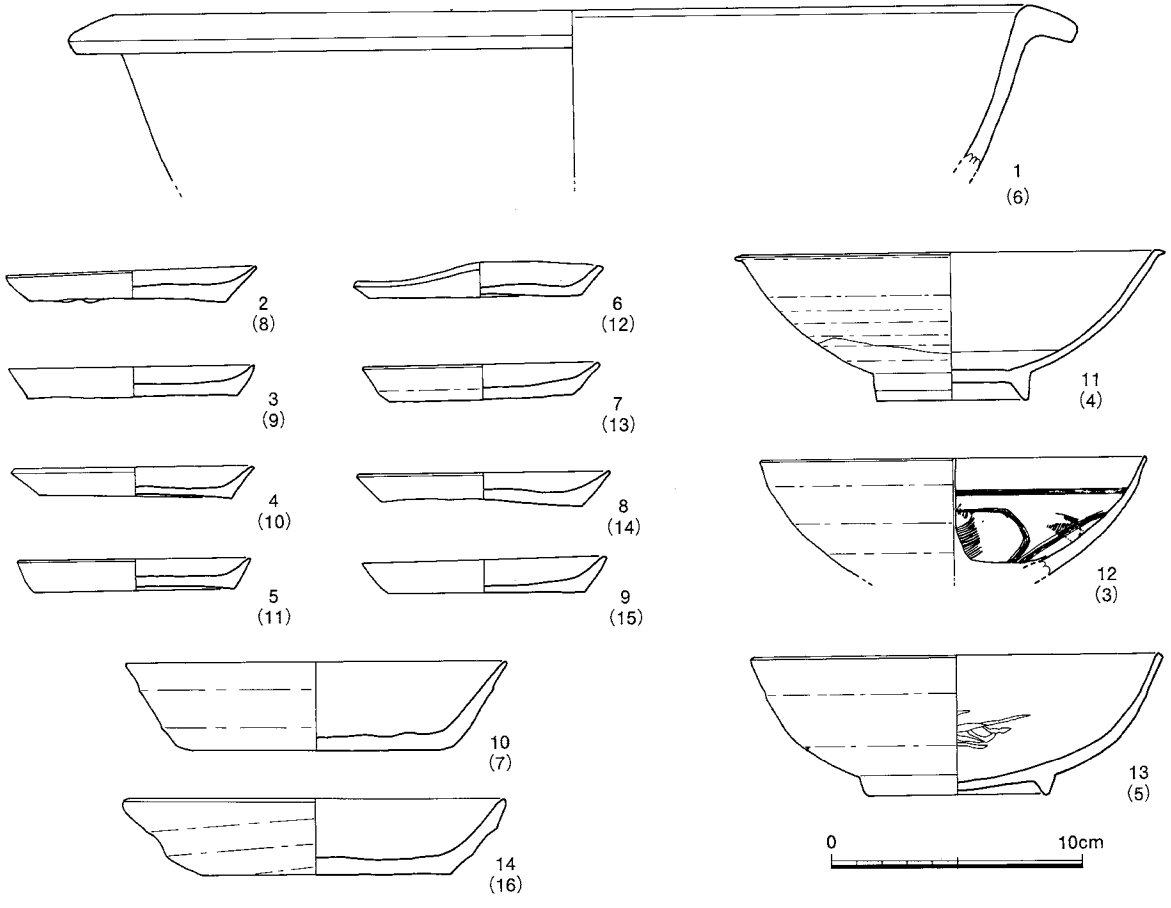


Fig. 8　出土遺物実測図1（1：3）

質など有機質製の材を用いたものであろう。検出面からの深さは2.8 mを測る。出土遺物は中国製磁器、陶器、土師器などを主として、比較的多く出土している。出土遺物から見て12世紀後半頃に比定できよう。

土壙108（Fig. 6）　調査区の西端、井戸107 の西側で検出した。楕円形を呈する土壙である。長径2.7 m、短径2.3 m、検出面からの深さは90cmを測る。土壙の西端に床面からかなり浮いた状態で土師皿、磁器などがまとまって出土した。出土状況から見て一括遺物と認められるが、興味深いことに縄文時代晩期～弥生時代前期初頭に位置付けられる石斧が出土している。そのほかの遺物から見て土壙108の時期は12世紀後半頃に比定できるので、どのような経緯でこの石斧が該期に存在していたのか、またこの土壙に廃棄されたのであろうか。

井戸120（Fig. 7）　調査区の北端で検出した。北側の一部が調査区外に出る。掘方の径は4.6 mを測る。検出面からの深さは2.6 mを測る。残存する井戸枠から推定して、井筒の径は80cmほどに復元されよう。井戸枠は最下位のみ残存しており、幅10cm、長さ30cmほどの板材を18枚円形に巡らせている。出土遺物は中国製磁器、陶器、土師器などを主として、比較的多く出土している。出土遺物から見て12世紀後半頃に比定できよう。

3．出土遺物

出土遺物についても中世遺物を主として図化した。

土壙34出土遺物（Fig. 8）　1は土師質の土鍋である。後円部は折り曲げた上部に粘土帯で肥厚させて鋤先状を呈する。内外面とも丁寧なナデ調整される。焼成も堅緻である。外面には煤が付着している。2～9は小皿である。いずれも糸切り底で、2、5、6、7、9には板目が見られ、3、4、8には

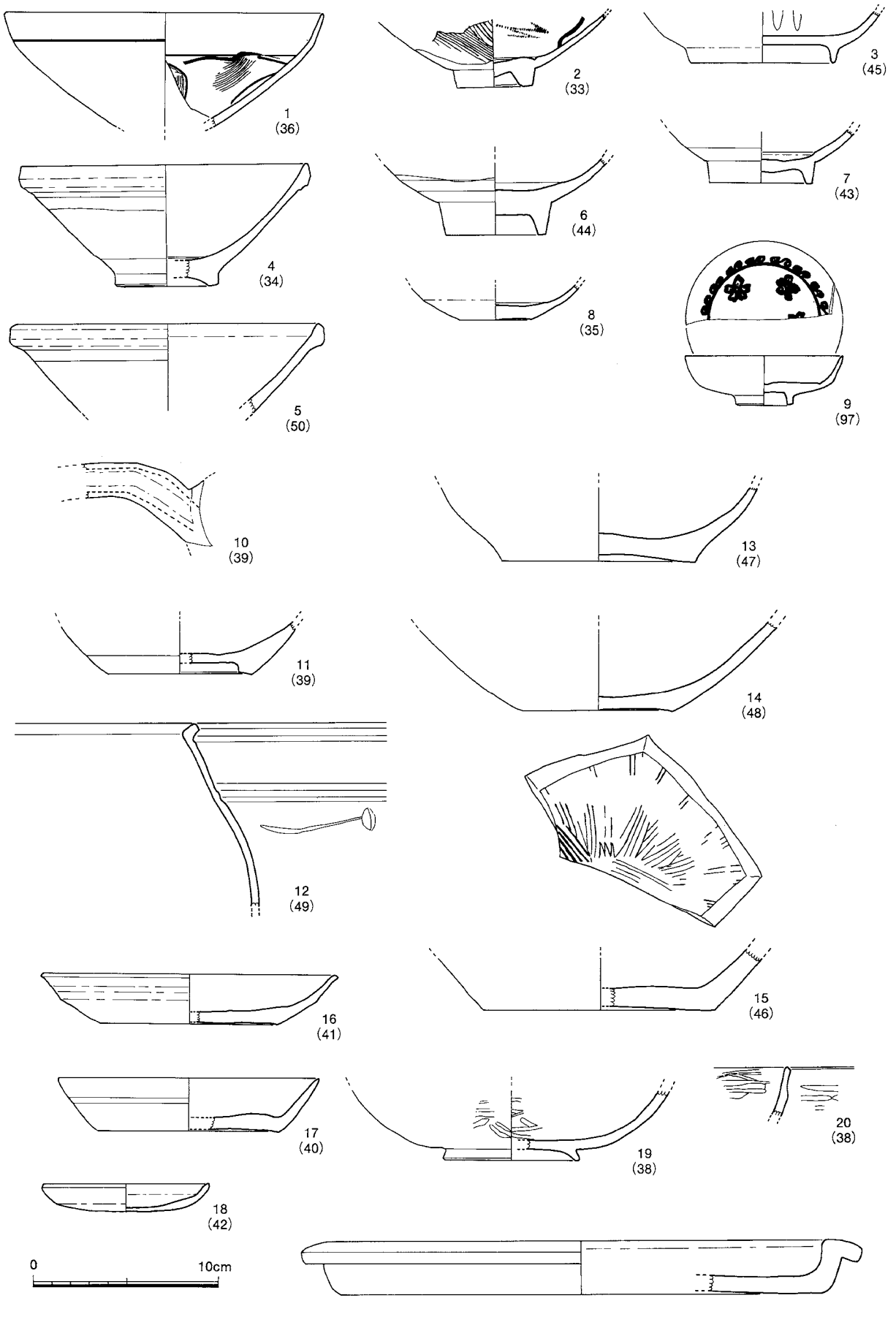


Fig. 9　出土遺物２（井戸107）（１：３）

見られない。法量を列記すると、2は口径9.8 cm、器高1.1 cm。3は径9.6 cm、高1.2 cm。4は径9.5 cm、高1.2 cm。5は径9.1 cm、高1.2 cm。6は径9.8 cm、高1.3 cm。7は径9.4 cm、高1.4 cm、8は径10cm、高1.2 cm、9は径9.6 cm、高1.3 cmである。10は土師器皿である。底部は糸切りで、口径13cm、底径11cm、器高3.5 cmを測る。11は白磁碗である。口縁部は端部で外反し、端部上面を水平に削り取る。高台は比較的高い。見込の周囲に一条の巻線が巡る。復元口径17cm、高台径6 cm、器高6 cmを測る。12は同安窯系の青磁碗であろう。外面は無文で、内面は片切彫と櫛描で文様を刻む。復元口径15cmを測る。13は瓦器の碗である。体部外面は回転ナデによりミガキを消している。高台は貼付である。復元口径16cm、器高5.5cm を測る。出土遺物は12世紀後半から13世紀前半代に属するものと考えられる。

土壙42出土遺物（Fig. 8）　14は土師皿である。底部は糸切りで板目が見られる。口径15cm、器高3 cmを測る。

井戸107出土遺物（Fig. 9）　1は同安窯系の青磁碗であろう。口縁端部で内側に屈曲する。外面には屈曲部に一条の巻線、内面には巻線と櫛描文を施す。2も同安窯系の青磁碗。外底部は露胎である。外面には櫛描文、内面には櫛描と片切彫で文様を施す。3は青磁の皿である。底部まで全面施釉である。時期的にかなり下るものと考えられる。4は白磁碗である。口縁部は玉縁状を呈し、体部は直線的に開く。外面は口縁部以外はほとんど露胎である。5も同様な器形の玉縁口縁の白磁碗。6は白磁碗の高台部である。高台は高い。外底部は露胎。見込の周囲に巻線を巡らす。7も白磁碗の底部である。8は白磁皿である。わずかに上底気味になり、体部は内湾しながら伸びる。9はやや緑掛かった褐色釉の磁器碗である。高台付きで見込に花文と雷文を象嵌する。時期的にかなり下るものと考えられる。10と11は胎土、色調が酷似しており、同一個体と考えられる。陶器の水注で、10は注口部、11は底部である。底部は内側のみを削り、高台を作り出す。灰緑色の釉調である。12は耳付きの壺である。口縁端部は短く外反する。肩部に沈線を巡らし、耳と耳の間も沈線でつなぐ。灰緑色の釉調である。13は備前焼の底部である。器形は甕であろうか。やや上底を呈する。14は陶器の底部である。器形は甕であろうか。内外面とも回転ナデ調整され、やや緑味を帯びた黒褐色の釉調である。15は摺鉢底部である。内面に櫛描で摺り目を入れる。16は土師皿である。内面に不定方向のナデが見られる。復元口径16cm、器高2.5cmを測る。17も土師皿。底面は板目が見られるが、糸切痕共ナデ消されている。復元口径14cm、器高2.9cmを測る。18は土師器小皿。底部は丸みを持ち、板目が見られる。径9 cm、器高1.5 cmを測る。19と20は接合しないが、同一個体と考えられる。瓦器の碗である。内外面にミガキを施す。21は瓦質の鉢である。外側に折れ曲がる口縁部を持ち、平底で浅い器形の鉢である。復元口径30cm、器高3 cmを測る。

近世頃まで下る可能性のある3や9を除くと、井戸107 出土遺物は12世紀後半代から13世紀前半代に属するものと考えられよう。

土壙108 出土遺物（Fig. 12 ）　土壙108 から出土した石斧については後述することとし、土師器、陶磁器関係について述べる。1～4は土師皿である。まず法量について列記すると、1は口径15cm、器高2.5 cm、2は径15.5cm、器高2.5 cm、3は径16cm、高3.2 cm、4は復元径15cm、高2.8 cmを測る。底部はすべて糸切りで、板目が見られる。5は土師器小皿である。復元口径7.8 cm、器高1.2 cmを測る。6は高台付きの白磁皿である。見込を輪状に削り取る。外面は体部下半から高台にかけて露胎である。これらの遺物は12世紀後半代に属すると考えられる。

井戸120 出土遺物（Fig. 10,11）　1から8は白磁碗である。1は口縁端部で緩やかに屈曲して外反する。高台は厚手で外面を直に、内面を斜めにきる。高台径に比して見込径が小さい。高台の若干上

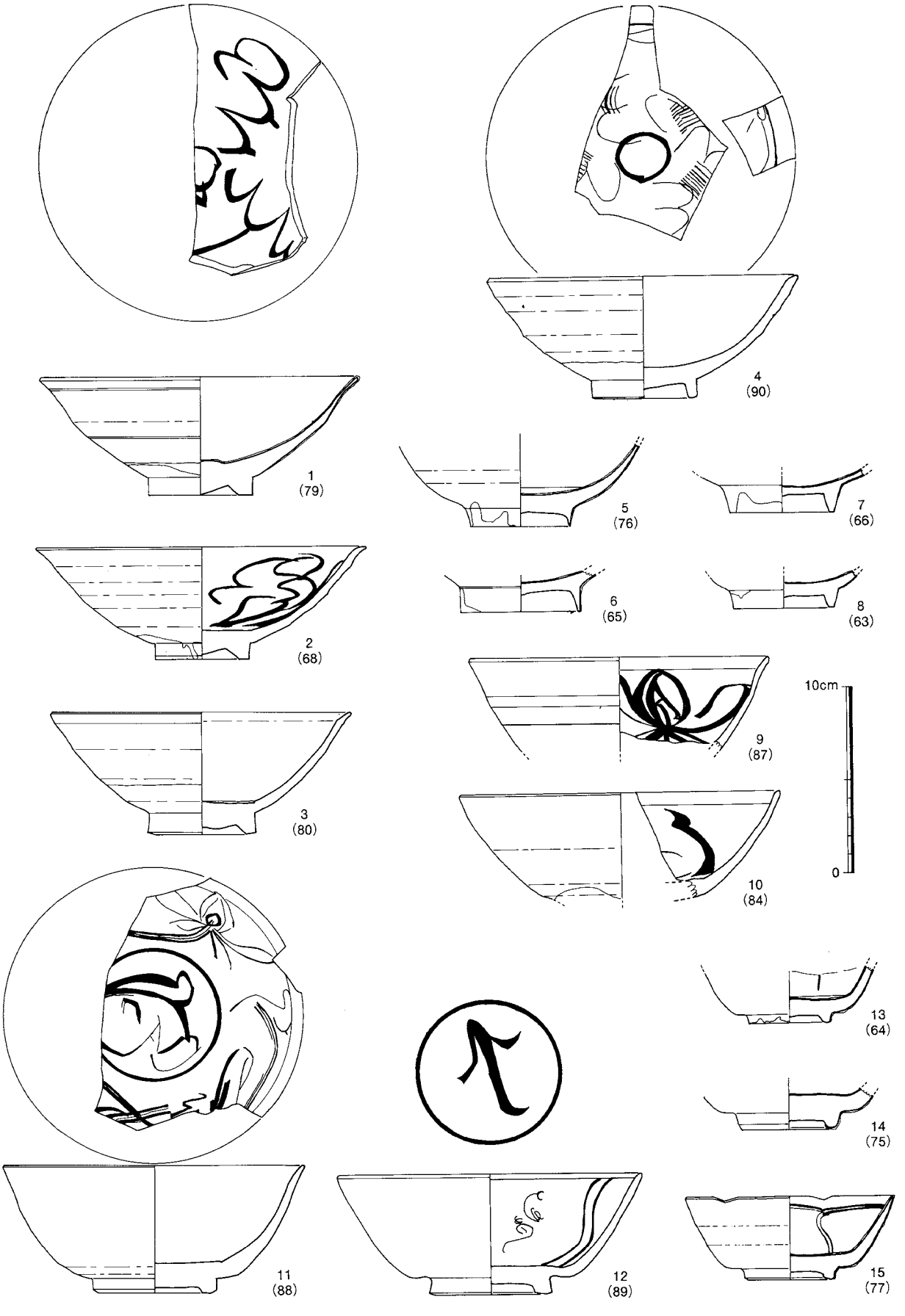


Fig.10　出土遺物３（井戸120-1）（１：３）

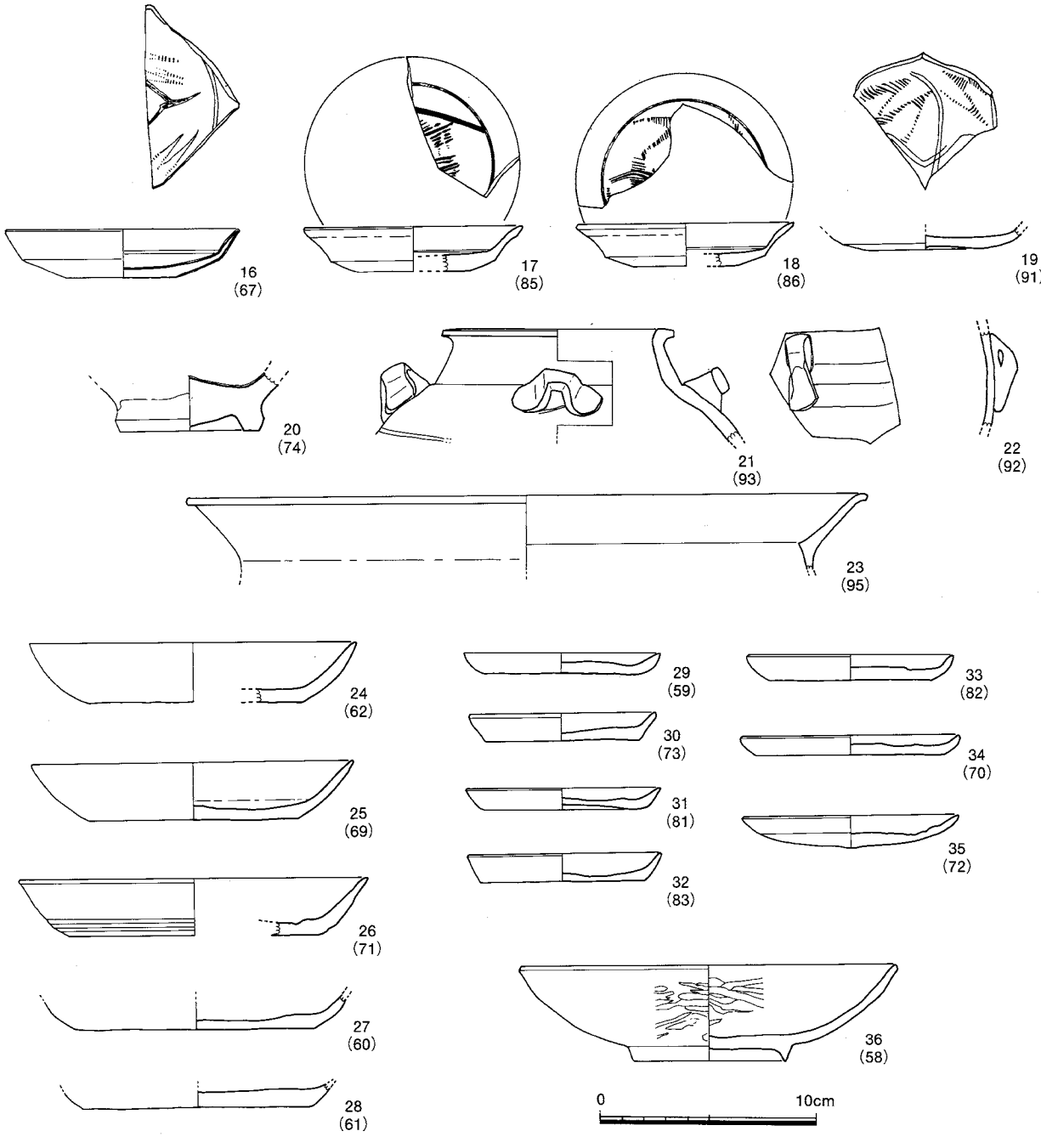


Fig.11　出土遺物４（井戸120-2）（１：３）

位から露胎である。内面に片切彫で文様を施す。２も類似した器形の碗である。高台は低く、１に比して径が小さいが、見込径は高台径とほぼ同じである。見込に段を持ち、内面に片切彫で文様を施す。７は体部の下位1/3 ほどが露胎である。口縁は端部付近でわずかに外反する。見込に段を持つ以外は無文である。４はやや青みを帯びた釉調を呈する。体部は丸みを持ち、端部でわずかに端反りになる。見込径は小さい。高台は露胎である。５は薄手の高台を有する碗である。見込の周囲に巻線を巡らすが、径が大きい。釉は一部高台まで及ぶ。６から８は高台のみの破片である。６、７は薄手で高い。釉の一部が高台に及ぶ。８はやや低く、高台の外面まで釉がかかる。９から15は青磁の碗である。いずれも龍泉窯系の青磁である。９は端部でやや端反りになる碗である。外面は無文で、内面に刮花文を施す。10はオリーブ色の釉調を呈する碗である。外面の高台近くは露胎になるようである。見込の周囲と口

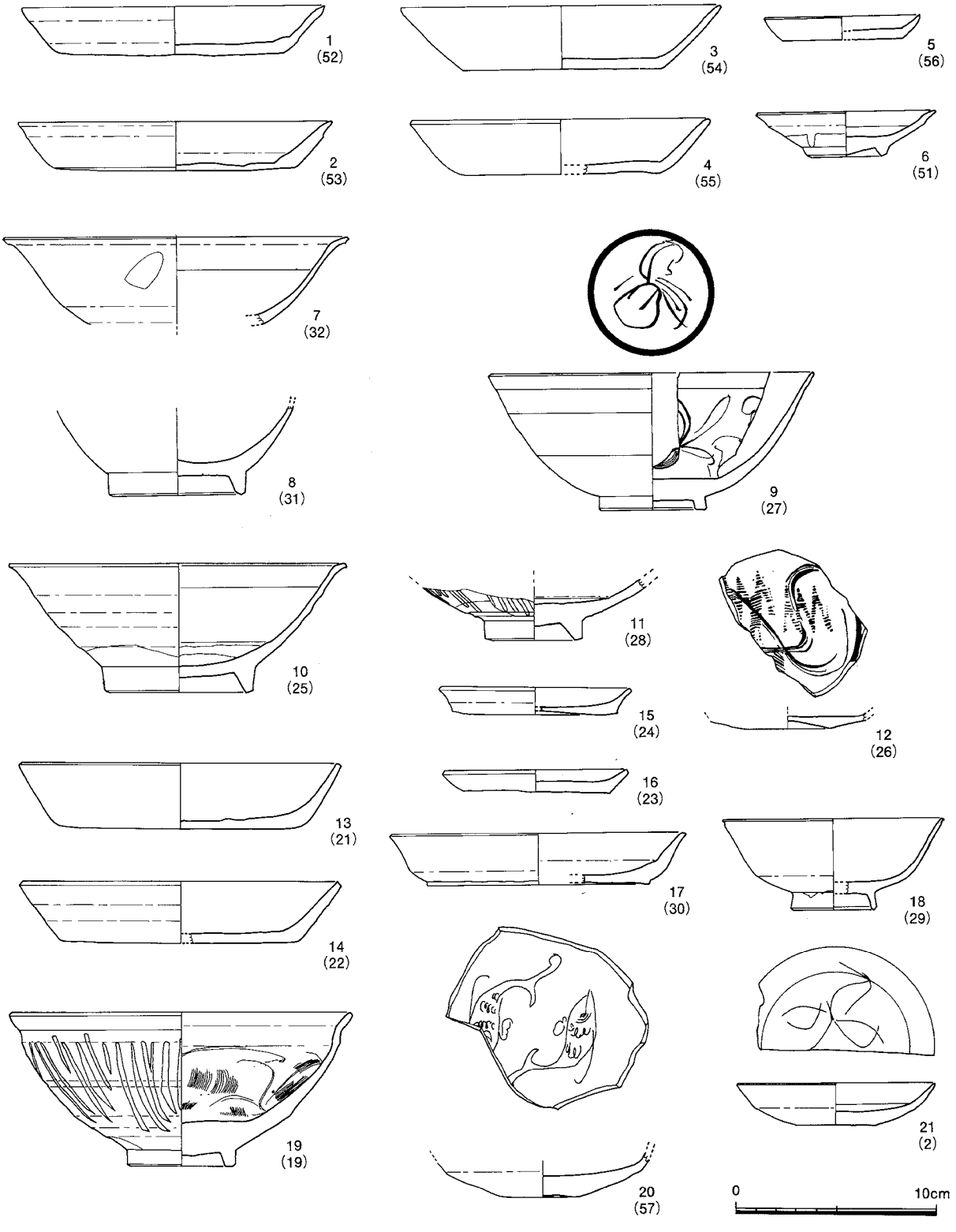


Fig.12　出土遺物５（１：３）

縁下に巻線を巡らし、体部内面に片切彫で文様を施す。11はほぼ直線的に開く体部を持つ。底部は厚く、高台が低い。畳付と外底部のごく一部を除いて、ほぼ全面に釉がかかる。体部内面と見込に刮花文を施す。12は青白色の釉調を呈する。畳付と外底部は露胎である。内面は片切彫による二条の平行線文により五分割され、その各区画に細い片切彫による飛雲文が施されている。見込にも草葉文が施される。13は小形の碗底部である。畳付と外底部は露胎である。内面には区画文が一部見られる。14も厚手の底部である。畳付と外底部は露胎である。見込は無文である。15は12を小形にしたような碗であるが、口縁部を輪花に作る。二条の平行線文で区画された中には文様を施されない。

Fig. 11 の16から18は青磁の皿である。いずれも同安窯系と考えられ、見込に櫛描文を施す。底部は釉を削り取るが、18は釉が底部まで完全には及んでいない。器形的には口縁部が直線的に開く16と、やや外反する17、18に分けられる。また釉調は16、19が灰青色で類似し、17、18はややオリーブ色がかかっているところが類似している。20は青磁の高台部である。器形は壺ではないかと考えられる。高台部は露胎。内面を斜めに削り、外面にも坦面を削りだして、断面五角形に作り出す。底部は厚い。21は褐釉陶器の有耳壺である。破片資料なので四耳壺に復元できるかどうかは不明。褐色の緻密な胎土で、黒色の砂粒を混える。釉調は暗いオリーブ灰色を呈する。耳の下の沈線は波状を呈すると考えられる。22も耳の部分の破片である。21とは異なり縦に付く。釉調は緑味の強い褐色である。23は陶器の盤である。器壁は薄い。強く外反する口縁部を持つ。釉調は明るいオリーブ色である。外面は口縁部の中ほど以下は露胎である。24から28は土師皿である。いずれも底部糸切りで、板目が見られる。25の口径14.8cm、器高2.7 cmを測る。29から35は土師器小皿である。底部は糸切りである。33には板目が見られない。1/2 以上の残存がある個体について法量を列記しておく。31は口径 9 cm、器高 1 cm。32は径8.9 cm、器高1.3cm 。33は径9.4cm 、器高1.2cm 。35は径10cm、器高1.5cm を測る。36は底部が丸みを帯びる。36は瓦器碗である。口径に比して器高が低く、浅い器形を呈する。内外面ともミガキを施す。口縁端でわずかに端反りになる。

そのほかの遺構出土遺物（Fig. 12 ）　7 、 8 は土壙108 と井戸107 の中間で検出した土壙106 の遺物である。現代の井戸、土壙などでかなり攪乱されており、108 、107 との関係などはよくわからない。108 、107 に属する遺物を含む可能性はある。 7 は白磁の碗である。無文であるが、内面の中ほどに一条の巻線を巡らす。 8 も白磁である。外面は高台まで施釉するが、内面は下半から見込にかけて露胎である。色調や器形から見て近世頃まで時期的に下がるものと考えられる。9 から16はピット88、17、18はピット89出土の遺物である。ピット88、89は径80cmほどのピットで、89が88を切る。規模に比して、比較的多くの中世遺物が出土している。 9 は龍泉窯系の青磁の碗である。高台は低く、畳付きから露胎である。外面は無文、内面に刮花文を施す。10は白磁碗である。口縁端部で屈曲し、外側へ引き出される。高台は高く、径も大きい。高台のやや上位から露胎である。見込を輪状に削り取る。見込の周囲に段状の巻線を巡らす。11は外面に櫛描文を施す同安窯系の青磁碗である。釉は高台まで及ばない。胎土は淡赤褐色で、外面は灰白色、内面は灰味の強いオリーブ色に発色している。12は見込に櫛描と片切彫で文様を施す同安窯系の青磁皿である。外底部は釉を強く削り取り、露胎とした結果上底状を呈している。13、14は土師皿。法量は13が口径16cm、器高3.3 cm。14は径16cm、高3.1 cmである。いずれも底部は糸切りで、板目が見られる。15、16は土師器小皿。15は1/2 の破片で復元口径9.4 cm、器高1.4 cmを測る。16は完形で径 9 cm、高1.2 cmを測る。いずれも底部糸切りで板目が見られる。ピット88出土の遺物は12世紀後半代と考えられる。17はピット89出土の土師皿である。小片でやや疑問はあるが、口径14.8cm、器高2.6 cmに復元される。底部糸切りで、板目が見られる。18は青灰色の釉調を呈する磁器碗である。高台は露胎で赤褐色を呈する。見込は輪状に釉を削り取り

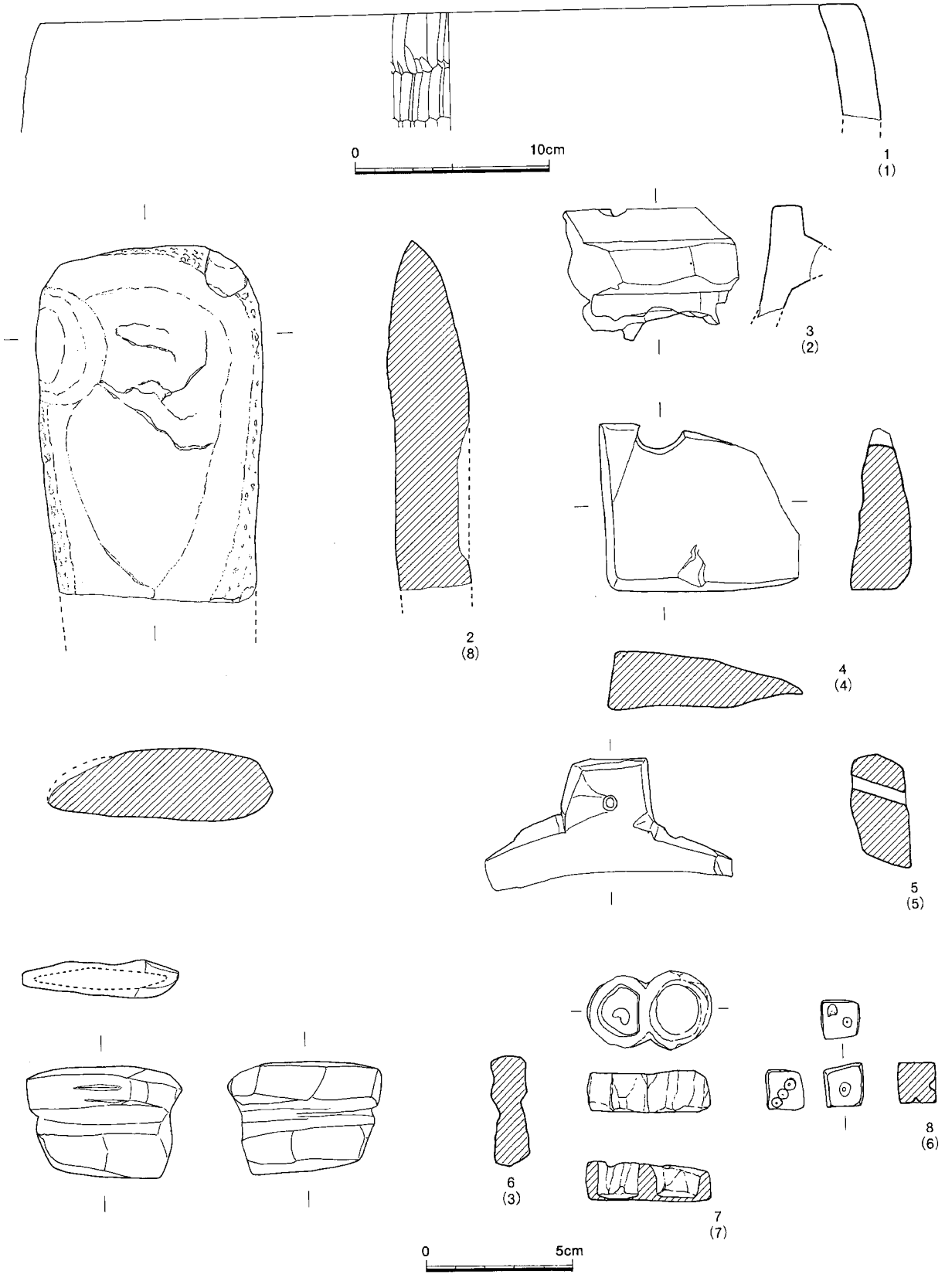


Fig.13　各遺構出土石製品（1：2、1：3）

白色土を施す。近世のものであろう。17の土師皿をピット88からの混入と考えればピット89は近世の所産である。19は現代の攪乱から出土した同安窯系の青磁碗である。口縁部は端部で屈曲して外反する。外面はヘラ状工具による条線文、内面は片切彫と櫛描によって文様を施す。遺物としては12世紀後半代のものであろう。20は青磁の皿。底部は釉を削り取る。径は小さいが厚手である。見込に片切彫で双魚文を施す。遺物としては12世紀後半代から13世紀前半代に属するものであろう。溝１の床面で検出した土壙69出土である。遺構の時期は近世である。21は白磁の皿である。底部は釉を削り取る。口縁部は緩やかに屈曲しながら内湾気味に伸びる。見込の周囲に沈線を巡らし、見込に刮花文を施す。底部に墨書があり、十字形を呈する。漢数字の可能性もある。

各遺構出土石製品（Fig. 13 ）　出土した石製品のうち主なものをFig. 13 に図示した。１は土壙108から出土した石鍋の口縁部片である。滑石製で、外面にはケズリ痕が顕著である。２も土壙108 出土。縄文時代晩期から弥生時代前期初頭頃に属すると思われる石斧である。基部を欠く。体部は扁平である。側縁に細かな凹凸があり、敲打痕とも考えたが、刃部端にも見られることから風化によるものと考えられる。刃部幅5.5 cmを測る。全面に火を受けた痕跡が見られる。３は石鍋の鍔部の破片である。滑石製。４は井戸107 出土の滑石製品である。平面方形もしくは長方形の板状のものに穿孔を施したものである。５は滑石製石鍋の転用品。土壙44出土である。穿孔を施したつまみを持つ。温石として用いられたものであろうか。６は滑石製の石錘である。中央に溝を切って紐掛けとする。７は二連の容器状滑石製品である。底部は極めて薄く、磨滅によって穴があいている。８は滑石製の賽子である。井戸120 出土である。目は現在のものと同じく向いあう目が７になる。

４．小結

今回の箱崎遺跡第６次調査は400 ㎡余りの狭い範囲の調査で、かつ都市化のために攪乱が多く、十分な成果をあげたとは言い難いが、いくつかの重要な点もまた明らかになったと言えよう。今回の報告では近世遺構については十分に検討することはできなかったが、調査区の全体に濃密に分布していることは明らかであり、少なくとも近世には町並みの中に取り込まれていたことは確実であろう。調査区周辺には勝楽寺、一光寺など近世地誌に見られる寺院も残っている。勝楽寺は筑前国続風土記によると応安年間前後の開基といい、一光寺は続風土記拾遺によると天文年間に名嶋に開基した後に移ってきた寺という。

中世遺構については、井戸２基、土壙４基を報告した。土壙やピットについては他にも該期に属するものがあると思われる。出土遺物のうち輸入磁器については、口縁部や高台部の小片を除いて、図化可能なものはほとんど図化している。また土師皿についても近世遺構に含まれている例も含めても図化したものと法量などはほとんど異ならない。これらの例から見ると調査区内の中世遺構は12世紀後半から13世紀前半の比較的短期間に限られるようである。該期は遺跡中央部や筥崎宮周辺では遺構が減少すると言われている時期である。この現象が箱崎遺跡の歴史的な変遷に意味のあることかどうかについては、６次調査地点周辺部、すなわち遺跡北端付近の調査がもう少し進んだ段階で判断しなければならない。

第３章　第７次調査の記録

Ⅰ　はじめに

１．　調査に至る経過

ダイア建設株式会社から本市に対して東区箱崎１丁目2711外4筆における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財課事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの箱崎遺跡群のほぼ中央に位置し、申請地の南西側約35ｍには第３次調査地点、同じく南西側約20ｍには第５次調査地点が位置している。福岡市教育委員会が、これを受けて1994年4月13日に試掘調査を実施した。現況は宅地で、調査の結果、現地表より140cm下の暗灰色粘質土層で遺構が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積200㎡を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。ダイア建設株式会社と福岡市との間に発掘調査および受託契約を締結し、調査は1994年11月15日から同年12月27日まで行われた。

Fig.14　第７次調査地点（1/1000）

２．調査体制

調査委託　ダイア建設株式会社
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花剛
調査総括　文化財部長　後藤直
　　埋蔵文化財課長　折尾学（前任）　荒巻輝勝（現任）
　　埋蔵文化財課第２係長　山崎純男（前任）山口譲治（現任）
調査庶務　埋蔵文化財課第１係　吉田麻由美（前任）西田結香（現任）
調査担当　埋蔵文化財課第２係　加藤隆也
試掘調査　菅波正人
調査作業　池田省三　越智信孝　川崎豊　中川敏男　平田穂積　廣田安平　三浦力　室威志
　　石川洋子　今別府序子　岩本三重子　澄川アキヨ　舎川キチエ　中川原美智子
　　中村フミ子　鍋山治子　播磨千恵子　藤野トシ子　宮本順子　森山キヨ子
　　山村スミ子　吉野幸子　鷲尾美佐子
整理作業　加集和子　平野徳子　山本良子

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等においてダイア建設株式会社をはじめとするみなさまには多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

遺跡調査番号	９４４８		遺跡略号	ＨＫＺ－７	
調査地地籍	東区箱崎１丁目２７１１外４筆			分布地図番号	３４－Ａ－１
開発面積	1,474.51㎡	調査対象面積	２００㎡	調査面積	８５㎡
調査期間	１９９４（平成６）年11月15日～12月27日				

Ⅱ　調査の記録

１．概要

調査地は後世の攪乱が著しく、調査は杭打ちが先行している状況から行った。まず、試掘トレンチを再度掘削し土層の確認、遺構の検出を行った。観察の結果、上面に良好な遺構が確認されないことから人力により約20～25cmの掘削後、茶褐色砂質土層の上面を第１面の遺構面として調査を行った。

調査終了後、約15～20cmの遺物包含層である茶褐色砂質土層を人力により掘削し、黄褐色を呈する砂丘上面を第２面として調査を行った。

井戸の掘削は、第２面調査終了後井戸の底部まで掘削を行った。井戸底部のレベルから、残存の可能性のある攪乱の底をさらえて井戸を２基検出して調査を終わった。

記述は基本的に調査の手順に合わせるが攪乱の底から検出された井戸等は、遺構ごとにまとめた。

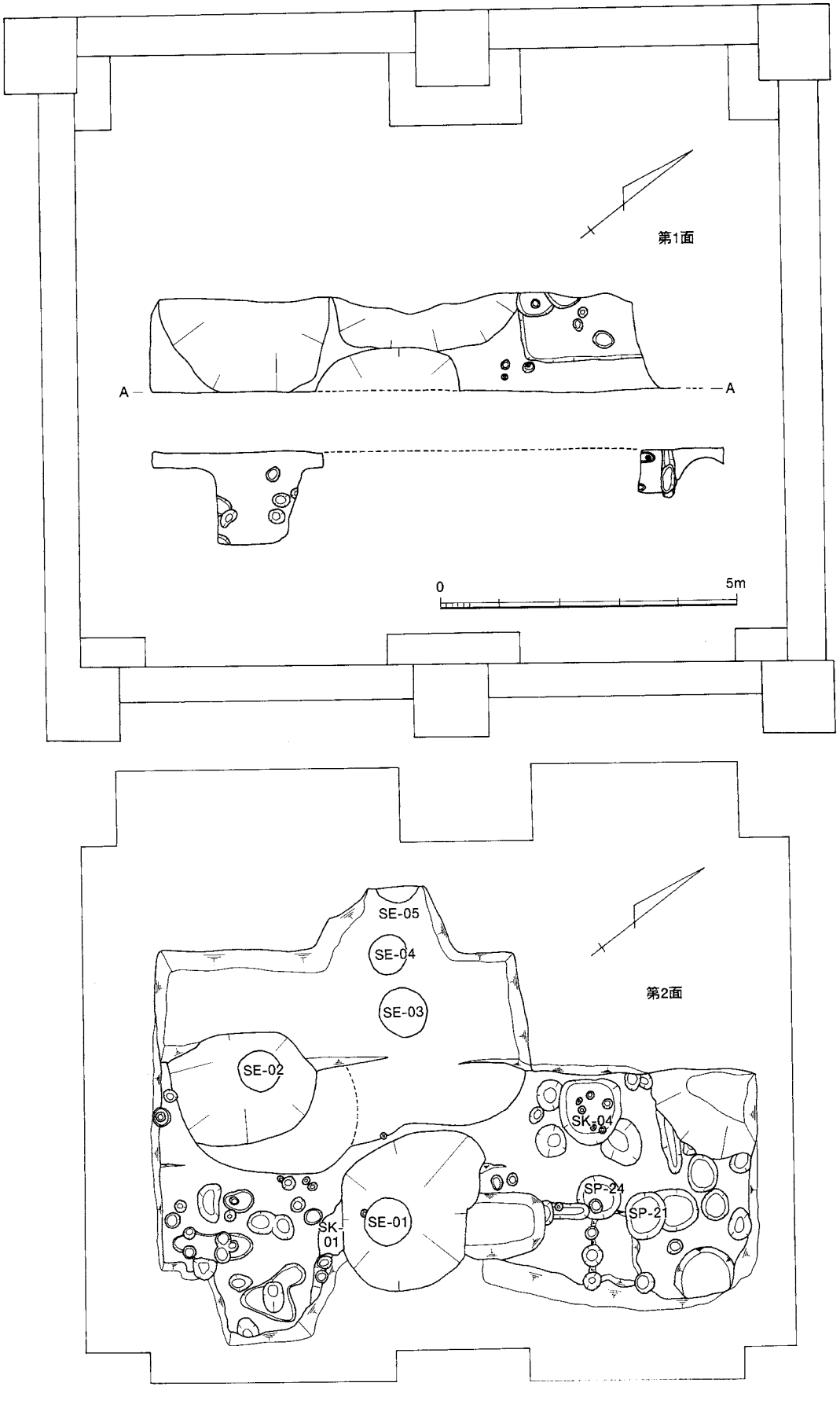


Fig.15　第１面、第２面遺構配置図（1/100）

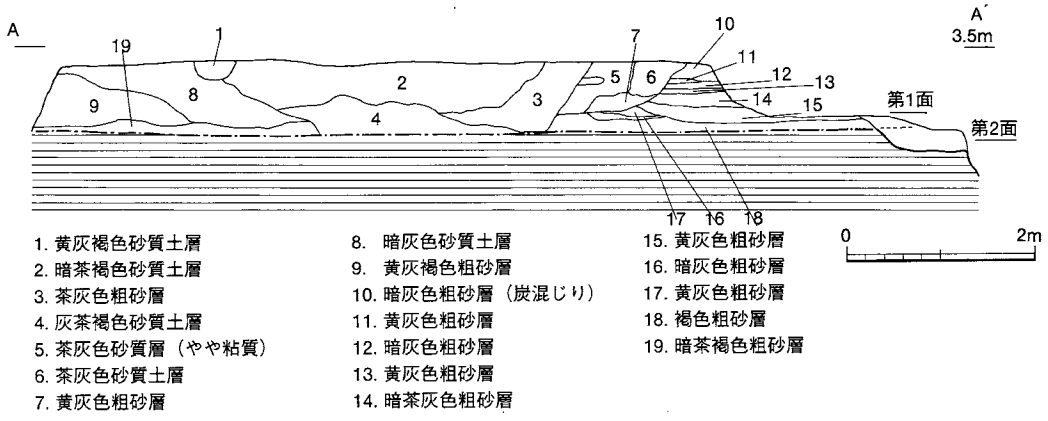


Fig.16　試掘トレンチ土層断面（1/80）

第１面の調査

遺構検出により、上面から掘り込まれた井戸と18個の柱穴を確認した。柱穴は深さ20～30cmのものが多く、良好な遺物は確認されなかった。

第２面の調査

砂丘層上面での検出遺構である。確認された遺構は上面からの井戸、柱穴、土壙などである。柱穴は47個確認され、その内26個から遺物が出土した。

２．検出遺構

（1）　井戸（ＳＥ）

今回の調査において５基の井戸址を調査した。ＳＥ－０１～０３は第１面の検出時に確認された。ＳＥ－０４、０５は攪乱の下位から検出された。

ＳＥ－０１（Fig.17、ＰＬ.11）

調査区の南側、第１面より検出した井戸である。ＳＫ－０１、ＳＥ－０２、０３を切る。第２面において径約2.5mの楕円形の掘りかた中央に、木桶を据えて井戸枠としている。井戸枠の板材は現存で幅10cm前後、厚さ約１cmを測り、長さは底から約45cmを検出した。井戸枠の下端の標高は65cmを測る。Fig.17の実測図は第２面調査後によるものである。

出土遺物（Fig.19、ＰＬ.12）

１、２は井筒内から出土した土師器小皿である。底部はすべて糸切りである。1 は口径8.4cm、底径7.5cm、器高1.3cmを測る。2 は口径8.6cm、底径5.8cm、器高1.4cmを測る。3 は土師器坏である。口径12.0cm、底径8.5cm、器高2.5cmを測る。4 は瓦器椀である。口径16.0cm、底径6.6cm、器高5.5cmを測る。5 は白磁碗の口縁部である。口径15.8cmを測る。6 は青磁碗の口縁端部の破片である。口径は不明だが、外面に鎬連弁を施す。7 は滑石製石釜の口縁である。破片の外面下部には煤が付着している。8 は滑石製錘である。厚さ1.4cmを測り、中央に1.2cmの穿孔があるものと考えられる。9 は土製錘である。10 は矢羽根文の瓦である。井筒内の下層から出土した。厚さ2.7cmを測り、反りの外側には矢羽根文のタタキによる文様が、内側には布目がのこる。

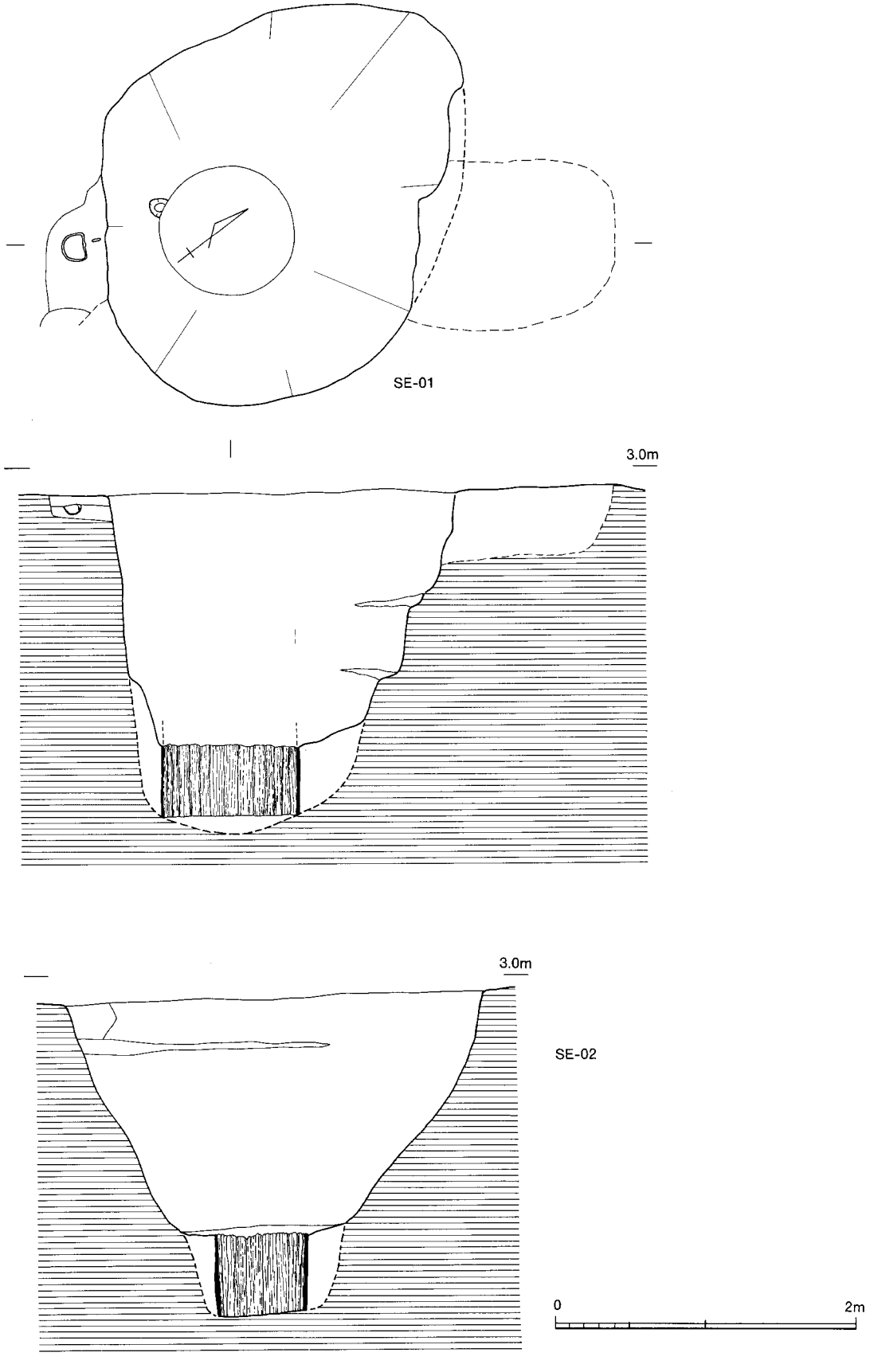


Fig.17　ＳＥ－01,02実測図（1/40）

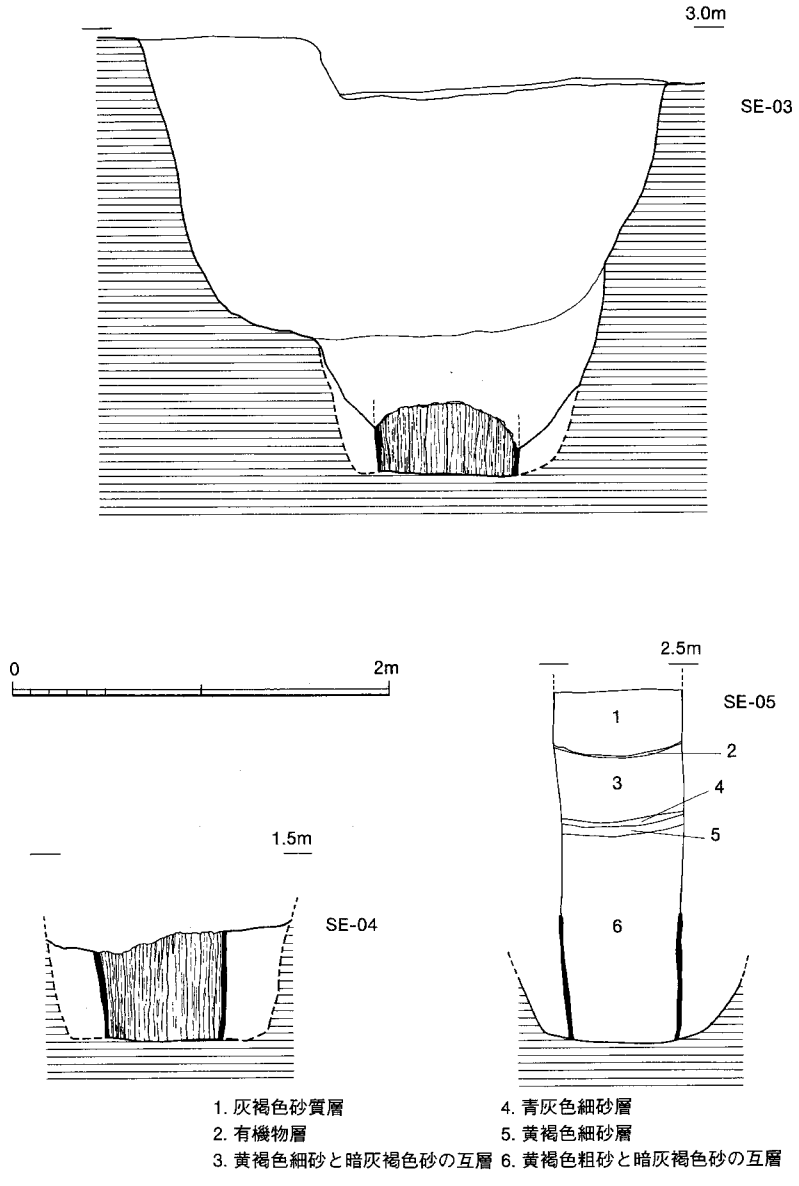


Fig.18　ＳＥ－03, 04, 05実測図（1/40）

これらの遺物から13世紀初頭が考えられる。

ＳＥ－０２（Fig.17、ＰＬ.11）

ＳＥ－０１の西側、第１面より井戸であることは考えられたが、掘りかたを確認したのは第２面上面においてである。ＳＥ－０１に切られ、ＳＥ－０３を切る。掘りかた中央に、井戸枠が確認された。井戸枠の板材は現存で幅11～13cm前後、厚さ約２cmを測り、長さは底から約50cmを検出した。井戸枠の下端の標高は72cmを測る。Fig.17の実測図は第２面調査後によるものである。

出土遺物（Fig.19、ＰＬ.12）

11～13 は土師器小皿である。すべて底部外面は糸切りである。11 は上面から出土した。口径7.8cm、底径6.2cm、器高1.4cmを測る。12 は井筒内より出土した。口径8.2cm、底径7.2cm、器高3.4cmを測る。13 も井筒内より出土している。口径9.0cm、底径7.2cm、器高1.5cmを測る。14 は土師器坏である。掘り方より出土している。口径13.4cm、底径9.7cm、器高2.6cmを測る。15 は青磁碗の口縁である。

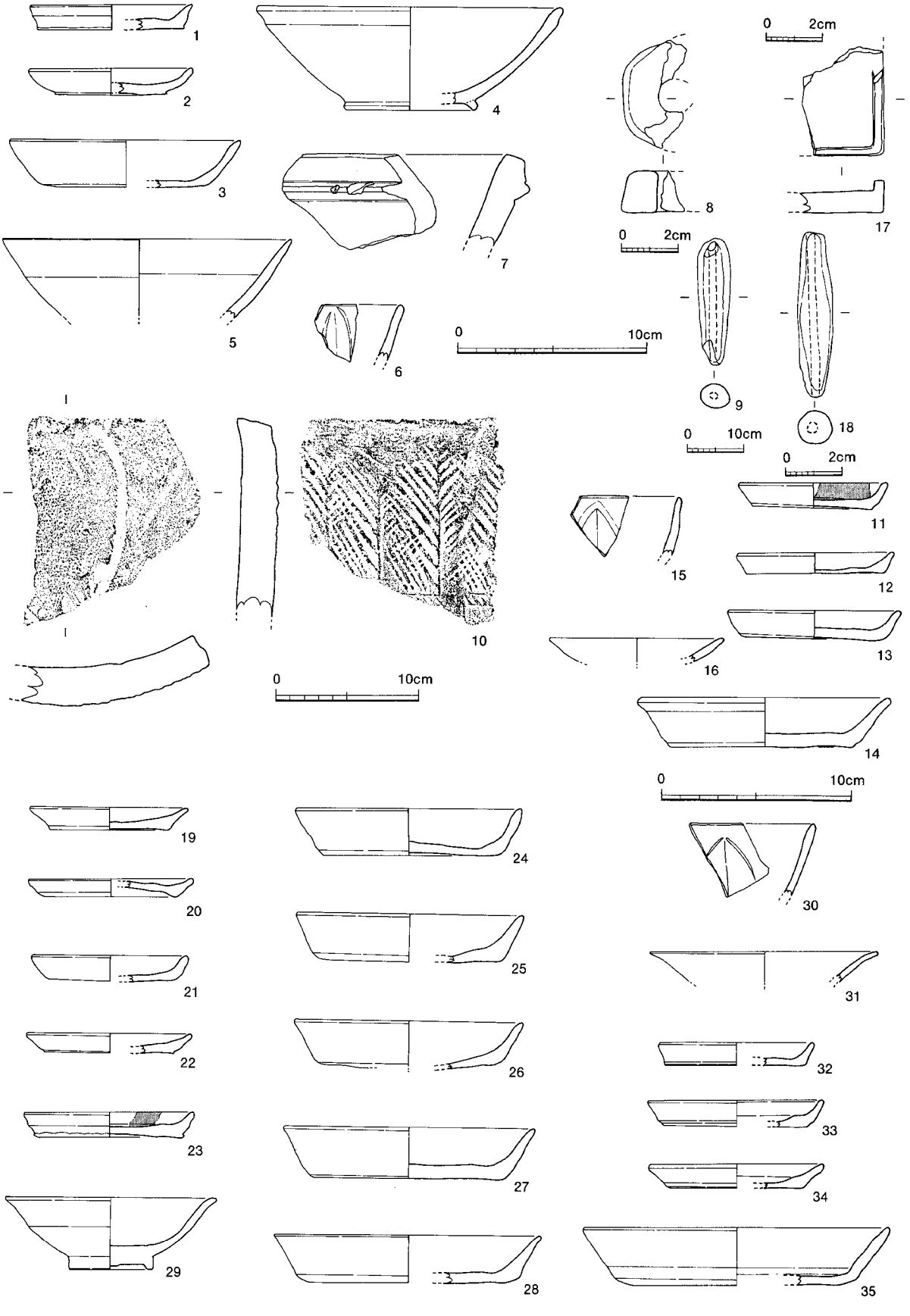


Fig.19　井戸出土遺物（1/2, 1/3, 1/4）

井筒内より出土した。外面に鎬蓮弁を施す。16 は井戸枠内より出土した口ハゲの白磁皿である。口径9.8cmを測る。17 は硯である。端部の厚さは1.1cmを測り、海の厚さは現存で0.7cmを測る。18 は土製錘である。長さ5.8cm、最大径1.3cmを測る。

これらの遺物から13世紀が考えられる。

ＳＥ－０３（Fig.18、ＰＬ.11）

調査区中央部、第１面より検出した井戸である。ＳＥ－０２に切られる。井戸枠と掘りかたの位置からＳＥ－０１、０２より掘りかたの径は大きいと考えられる。井戸枠の板材は現存で幅10～11cm前後、長さは約40cmを検出した。井戸枠下端の標高は60cmを測る。Fig.18の実測図は第２面調査後によるものである。井戸枠内から良好な遺物は出土していない。

出土遺物（Fig.19、ＰＬ.12）

図化した遺物はすべて掘り方からの遺物である。19～23 は土師器小皿である。外底はすべて糸切りである。19 は口径8.2cm、底径6.2cm、器高1.2cmを測る。口縁は底部と段をもたず緩やかに立ち上がる。20 は口径8.6cm、底径6.2cm、器高0.9cmを測る。底は上げ底状を呈する。21 は口径8.2cm、底径6.4cm、器高1.3cmを測る。 22 は口径8.6cm、底径6.6cm、器高1.0cmを測る。23 は口径8.2cm、底径6.4cm、器高1.3cmを測り、口縁内面に煤が付着している。24 ～28 は土師器坏である。外底はすべて糸切りである。24 は口径11.8cm、底径9.3cm、器高2.5cmを測り、口縁は丸みをもって立ち上がる。25 は口径11.8cm、底径、9.6cm、器高2.5cmを測る。26 は口径11.9cm、底径9.5cmを測る。27 は口径13.2cm、底径9.8cm、器高2.7cmを測る。28 は口径13.9cm、底径10.3cm、器高2.5cmを測る。29 は青磁碗である。口径11.0cm、底径4.5cm、器高3.7cmを測る。

これらの遺物から13世紀が考えられる。

ＳＥ－０４（Fig.18、ＰＬ.11）

ＳＥ－０３の北西側にて検出された。上面は削平されていて井戸枠最下位のみが検出された。井戸枠の径は60cmを測り、板材は現存で幅10cm前後、長さは約60cmを検出した。井戸枠下端の標高は50cmを測る。

出土遺物（Fig.19）

図化した遺物は井筒内の遺物である。30 は青磁碗の口縁破片である。外面に鎬蓮弁が見られる。31 は口ハゲの白磁皿である。口径12.6cmを測る。

遺構の時期は遺物から13世紀に位置づけられる。

ＳＥ－０５（Fig.18、ＰＬ.11）

調査区の中央部北側端にて検出された。掘りかたは削平されていて井戸枠最下位のみが検出された。井戸枠の径は55cmを測り、板材は現存で幅8～10cm前後、長さは約63cmを検出した。井戸枠下端の標高は50cmを測る。

出土遺物（Fig.19）

図化した遺物はすべて井戸枠内から出土した。32～34 は土師器小皿である。外底はすべて糸切り

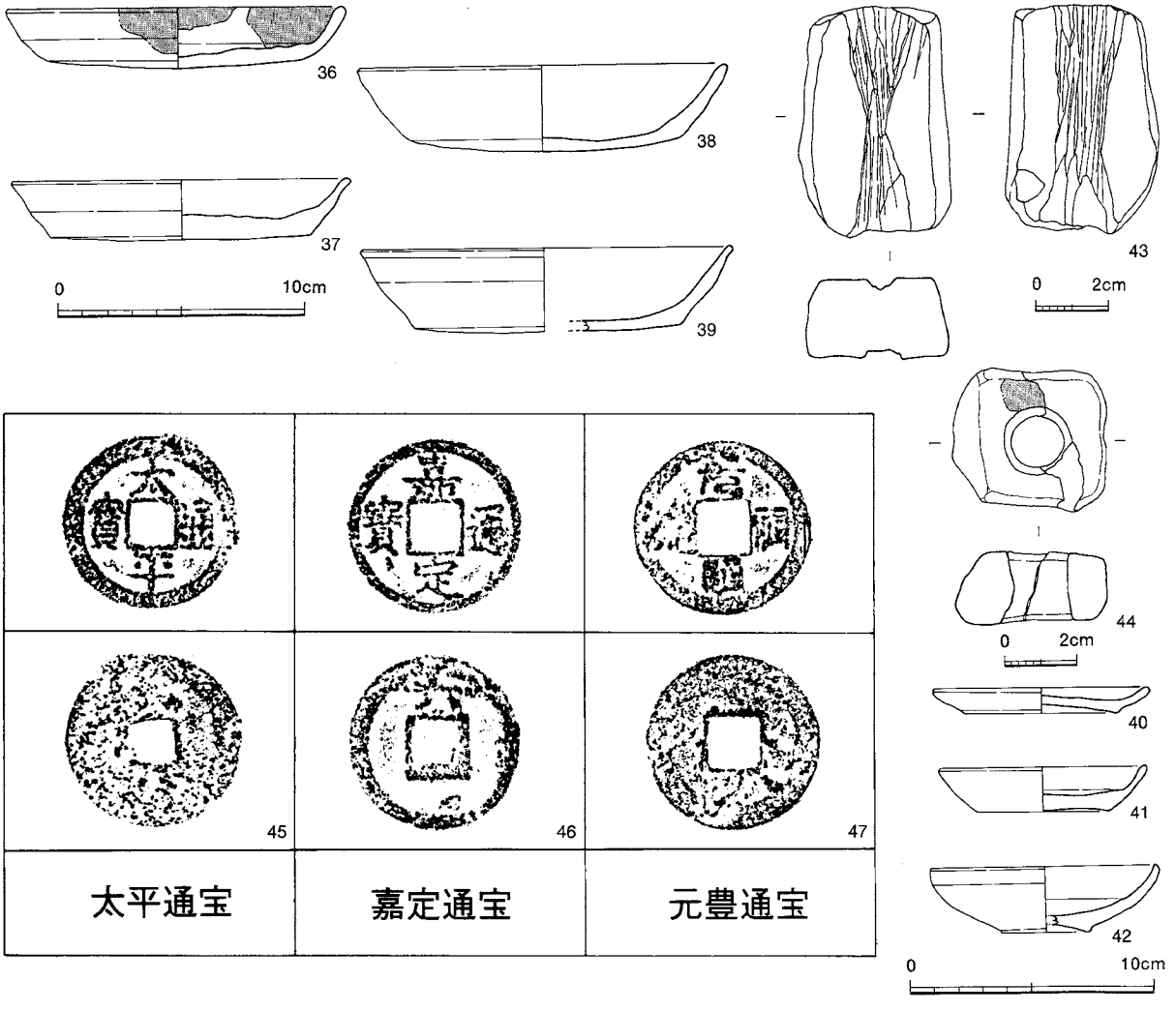


Fig.20　包含層出土遺物（1/1,1/2,1/3）

である。32 は口径8.2cm、底径7.3cm、器高1.2cmを測る。33 は口径9.2cm、底径7.5cm、器高1.4cmを測る。34 は口径9.2cm、底径7.0cm、器高1.3cmを測る。35 は土師器坏である。口径16.1cm、底径10.8cm、器高3.0cmを測り、口縁はやや外湾しながら立ち上がる。

遺構の時期は遺物から13世紀に位置づけられる。

（2）遺物包含層

砂丘層上面を覆う茶褐色砂質土層である。第2面検出の遺構の埋土はこの包含層と酷似するため、この層の上面から掘られたが第1面で確認されず、第2面で検出された遺構もあると考えられる。

包含層内遺物

36 ～39 は土師器坏である。外面底部はすべて糸切りである。36は口径13.8cm、底径10.0cm、器高2.5cmを測る。内外面に煤の付着がみられる。37 は口径13.8cm、底径10.5cm、器高2.5cmを測る。底部に比べ口縁の器壁は薄くつくる。38 は口径15.2cm、底径11.0cm、器高3.5cmを測る。底部に丸みをもたせている。39 は口径15.3cm、底径11.0cm、器高3.4cmを測る。40 は土師器小皿である。

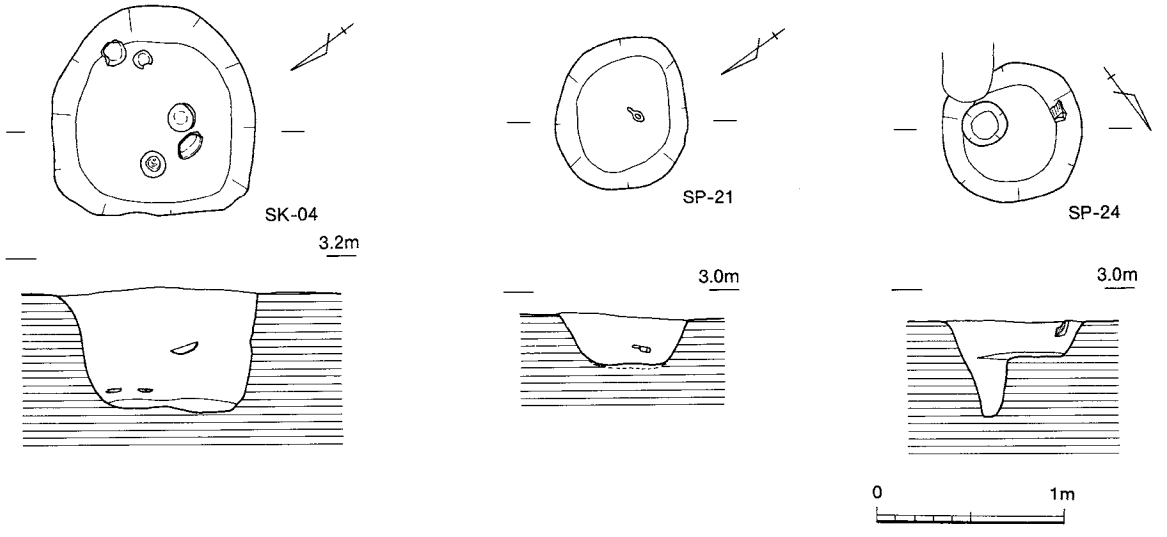


Fig.21　ＳＫ、ＳＰ実測図（1/40）

口径8.8cm、底径6.2cm、器高1.0cmを測る。上げ底状を呈し、糸切りである。41・42 は白磁皿である。41 は口径8.6cm、底径5.3cm、器高1.8cmを測る。外面底部は露胎である。42 は口径9.4cm、底径3.6cm、器高2.7cmを測り、上げ底状を呈する。外面底部は露胎である。43・44 は滑石製錘である。２種あり、43 は長辺6.3cm、短辺4.2cm、厚さ2.2cmを測るもので、板状のものに両面から溝を彫り込むものである。 44 は一辺約４cm、厚さ２cmの平面形、方形のものの中央に1.4cmの穿孔を施すものである。45～47 は銅銭である。今回の調査では、５枚の銅銭が出土しており、銭銘の解読できるものは３枚だけであった。45 は太平通宝、46 は嘉定通宝、47 は元豊通宝である。

（３）土坑、土壙（ＳＫ）

ＳＫ－０１

ＳＥ－０１に大きく切られるが、長方形の掘りかたをもつと思われる。遺構内より人骨を検出した。人骨は頭骨のみであり、検出時の状況は上部にあたる右半分を失っており、頸から下をＳＥ－０１に切られる。頭位は南西方向と考える。所属する時代は覆土が黒褐色を呈すること、13世紀初頭の井戸に切られることから12世紀前半から13世紀初頭と考えられる。

ＳＫ－０４（Fig.21、ＰＬ.11）

第２面の砂丘の上面にて検出された。直径1.1ｍを測り、平面形はほぼ円形を呈する。検出した深さは65cmを測り、覆土は上層が灰褐色砂層、下層が黒褐色粘質土層である。砂丘の上面に、ある程度黒色土が堆積した後に掘り込まれている。但し、人為的な整地かどうかの判断は今回の調査では不明である。

出土遺物（Fig.22、ＰＬ.12）

48～53は土師器小皿である。外底はすべて糸切りである。48 は口径9.1cm、底径7.2cm、器高1.5cmを測り、外底に丸みをもつ。49 は口径9.2cm、底径7.1cm、器高1.2cmを測る。50 は口径9.4cm、

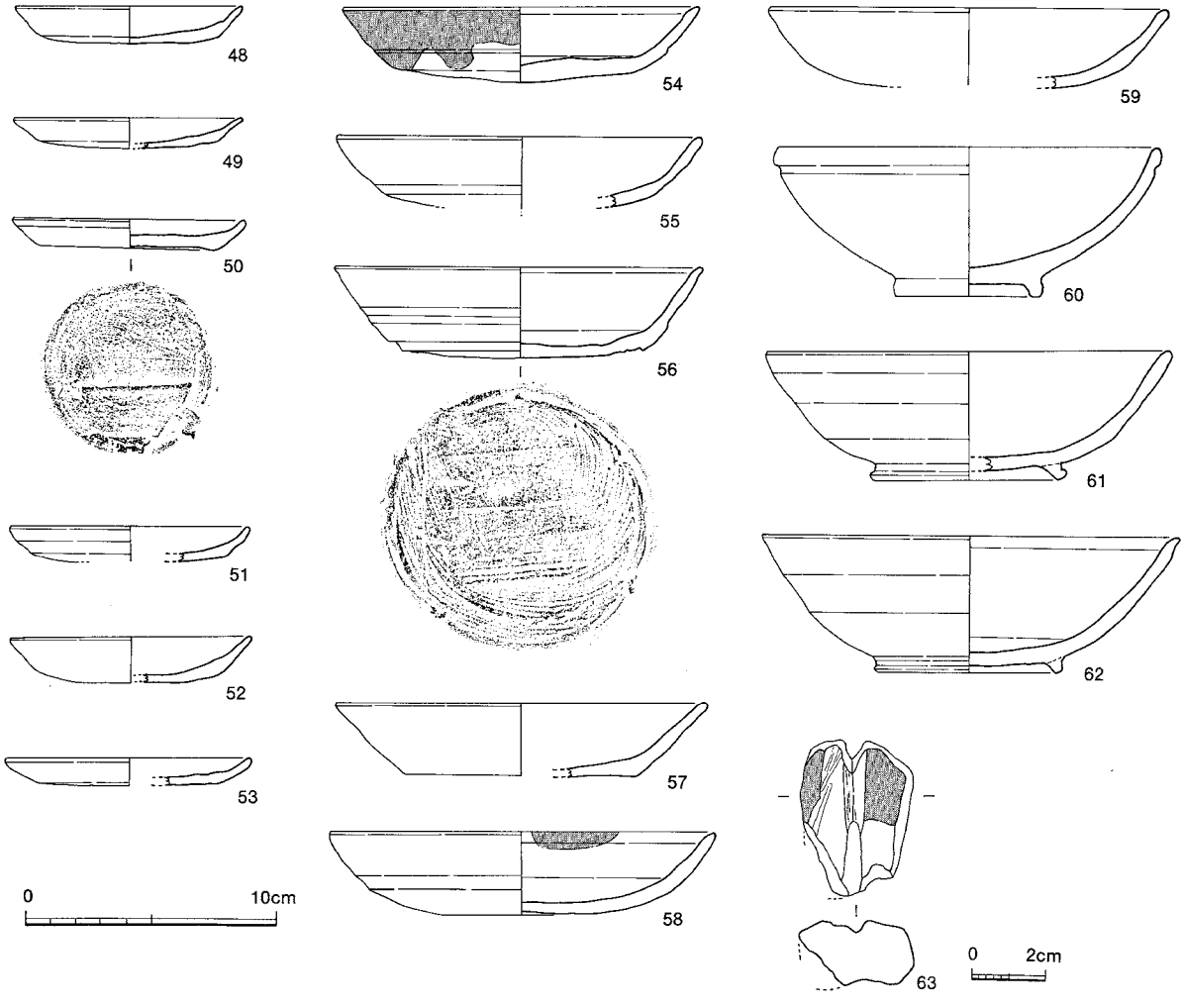


Fig.22　ＳＫ－04出土遺物（1/2,1/3）

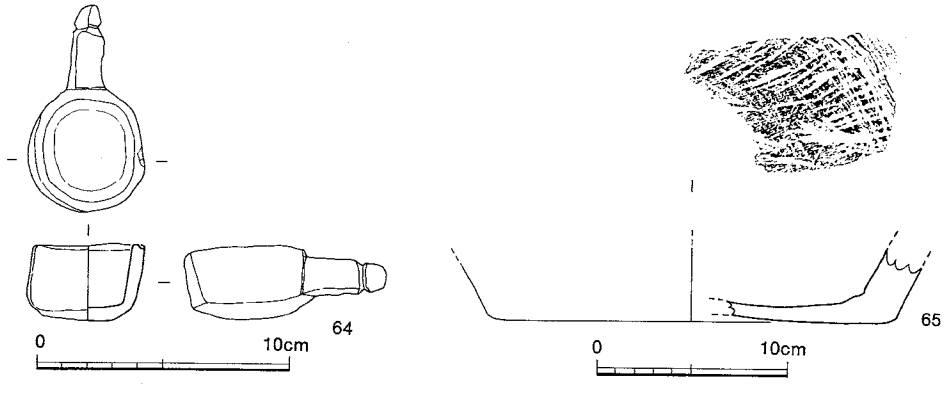


Fig.23　ＳＰ出土遺物（1/3,1/4）

底径6.9cm、器高1.2cmを測る。板状圧痕が残る。51は口径9.6cm、底径7.8cmを測る。52は口径9.7cm、底径7.0cm、器高1.8cmを測る。53は口径9.8cm、底径7.1cm、器高1.1cmを測る。54～59は土師器坏である。54は口径14.2cm、底径9.7cm、器高3.0cmを測り、外面に煤の付着がみられる。55は口径14.8cm、底径10.6cmを測る。56は口径15.0cm、底径10.0cm、器高3.6cmを測る。外底に板状圧痕が残る。57は口径14.8cm、底径9.4cm、器高3.0cmを測る。58は口径15.4cm、底径9.4cm、器高3.3cmを測り、底に丸みをもつ。59は口径16.0cmを測り、底に丸みをもつ。60は白磁碗で口径15.2cm、底径5.8cm、器高6.0cmを測る。口縁は小さい玉縁である。61・62は瓦器椀である。61は口径16.2cm、底径7.8cm、器高5.2cmを測る。62は口径16.6cm、底径7.6cm、器高5.5cmを測る。63は滑石製錘である。煮沸器の転用と思われ、表面に煤の付着がみられる。板状のものを両側から溝を彫り込むものである。

（4）柱穴（ＳＰ）

ＳＰ－２１（Fig.21、ＰＬ.11）

第２面、東側にて検出された。直径約70～80cm、残存深さ25cmを測り、楕円形を呈する。

出土遺物（Fig.23、ＰＬ.12）

64 は滑石製の匙であり、長さ8.2cm、幅4.4cmを測る。匙部の長さは4.8cm、幅4.4cm、厚さ3.0cmを測る。柄部は長さ3.4cm、最大幅1.4cm、最大厚さ1.2cmを測り、先端は溝を彫りくびれ状になる。

遺構の時期は他に遺物が出土しておらず不明である。

ＳＰ－２４（Fig.21）

直径約75cm、残存深さ20cmを測り円形を呈し、遺構内南東部に深さ50cmの柱穴を有する。

出土遺物（Fig.23）

65 は滑石製鍋の底部である。遺構の時期は他に遺物が出土しておらず不明である。

３．小　結

今回の調査面積は狭いものであったが、第３次、第４次調査と同様に、井戸址、土坑、柱穴など集落関係の遺構を検出した。

今までの調査から11世紀代より集落の形成が始まるとされているが、今回の調査においては12世紀前半の遺構が最も時代的に遡るものであった。しかし、覆土が茶褐色粘質土を呈することから、砂丘上面にある程度の粘質土が覆った後に遺構がつくられたことは明らかで、それ以前から確実に砂丘の陸地化が進められていたと言える。また、13世紀代に至っては複数の井戸が切り合うことなどから定型化した集落の景観が伺える。

土壙墓と考えられる遺構から人骨が出土した。箱崎遺跡群内では初めての人骨の出土であり、集落の形成段階にある時期の形質人類学的資料として重要なデータが得られた。分析の結果は遺跡群の形成において、物だけに及ばず人の動きからも調査、研究する必要性を示すものであった。

ところで、筥崎宮周辺においては開発の速度が活発化しており、今後も調査の増加が予想されるが、調査体制を整えた上で筥崎宮創建当時（10世紀中頃）の遺構の確認、集落の形成を担った人々の歴史的評価等、今後の調査成果を待ちたい。

Ⅲ．箱崎遺跡群第７次調査出土の中世人骨

中橋孝博
（九州大学大学院比較社会文化研究科）

はじめに

港町、商都として永い歴史を持つ博多とその周辺からは、これまでかなりの古人骨が出土し、その地域的特徴などについて多くの情報が寄せられてきた。ただ、その中で縄文人骨と、古代～中世期の資料が不足しているため、当地域の時代的な推移を追う上で一つの障害となっている。1994年度の調査によって、旧博多市街区に近い箱崎地区から新たに中世人骨が出土した。保存不良のため顔面の一部のデータしか得られなかったが、貴重な追加資料であり、以下にその検討結果を報告する。

遺跡・資料・方法

遺跡は箱崎宮の北東、福岡市東区箱崎１丁目の、旧海岸線にも近い標高2.8mの位置に所在する。1994年11月から12月にかけて、集団住宅建設に伴う発掘調査が福岡市教育委員会によって実施され、１２世紀前半から１３世紀にかけての遺構、遺物が検出された。その中の１基の土壙墓から人骨の頭部が出土した。体部は１３世紀の井戸掘削の際に失われている。また、頭部も保存不良のため、地表面側にあたる右半部は欠落している。人骨の所属時代は考古学的な検証から１２世紀前半～１３世紀始めのものと考えられている。

計測はMartin-Saller(1957) に従い、性判定には筆者の保存不良骨に対する方法（中橋、1988）を援用した。

結果・考察

眉間、眉弓部が強く膨隆し、乳用突起のサイズも大きく、男性と見なされる。また、歯の咬耗は進んでおらず、縫合の開離状況などから、比較的若い成年人骨と考えられる。

土圧による歪みのため、計測可能部位は一部に限られたが、得られた結果を、比較群と共に表示する。

この男性の特徴として、かなりの高顔傾向が上げられる。これまで近隣の博多から出土した中世人骨も類似する特徴を見せており、他地域の中世人集団とは大きく異なっている。当地は既に弥生時代から、渡来人によってもたらされた高顔傾向が指摘されているが、その特徴が時代的にどう推移するのか。もし、少数例ながらこれまでの事例（中橋、1989,1991）が示すように、博多とその周辺域の中世人が連続して高顔傾向を維持していたとするならば、人骨の時代変化の要因を考える上で興味深い問題提起となろう。他地域では一般的には中世になると低顔へと変化しており、多少の地域差はあるものの（中橋、１９８５）、かなり汎日本的な現象とされていた。当地域での変化が他と異なっていることが事実ならば、その原因を探ることは、日本の中世人の時代特性を明らかにする上でも有力なヒントとなろう。今後、さらに資料を充実させて検討を続ける必要がある。

謝辞

本人骨を研究する機会を与えていただいた福岡市教育委員会の関係各位に深謝いたします。

表１　頭蓋側値の比較（男性）

		箱崎７次（中世）	博多26-2[1)]（中世）	博多42-1[2)]（中世）	吉母[3)]（中世）		材木座[4)]（中世）		天福寺[5)]（近世）		西南日本[6)]（現代）	
					N	M	N	M	N	M	N	M
46	中顔幅	(102)	(104)	—	19	100.3	22	99.9	24	101.8	107	99.9
47	顔高	125	122	126	11	117.3	—	—	14	126.9	66	122.2
48	上顔高	73	75	74	16	69.8	12	68.4	18	74.5	92	71.8
47／46	顔示数（V）	122.5	117.3	—	11	116.5	—	—	13	123.9	65	122.2
48／46	上顔示数（V）	71.6	72.1	—	16	69.8	10	67.7	17	73.1	91	71.8
51	眼窩幅（左）	43	43	—	18	42.0	23	42.0	24	42.6	108	43.0
52	眼窩高（左）	30	37	—	18	34.4	23	33.7	24	34.1	108	34.4
52／51	眼窩示数（左）	69.8	86.0	—	18	82.1	23	80.1	23	80.9	108	80.2
55	鼻高	(50)	54	—	16	51.4	25	52.0	24	52.9	108	52.2
57	鼻骨最小幅	8.3	9	7.6	17	7.9	108	8.0	25	7.1	108	7.1

1）中橋（1989）、2）中橋(1991）、3）中橋・永井(1985)、4）鈴木（1956）、5）中橋(1987)、6）原田（1954）

文　献

原田忠昭（１９５４）：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」、人類学研究１。

Martin-Saller(1957): Lehrbuch der Anthropologie. Bd.I.Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

中橋孝博（１９８７）：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」、人類学雑誌　９５.

中橋孝博(１９８８)：「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集)、六興出版。

中橋孝博(１９８９)：「博多遺跡群第２６次調査・築港線関係第３次調査出土の中世人骨について」、福岡市埋蔵文化財調査報告書第２０４集、福岡市教育委員会。

中橋孝博（１９９１）：「博多遺跡群第４２次調査出土の中世人骨について」福岡市埋蔵文化財調査報告書第２４５集、福岡市教育委員会。

中橋孝博・永井昌文（１９８５）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。

鈴木尚（１９５６）：「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」、岩波書店。

図　版

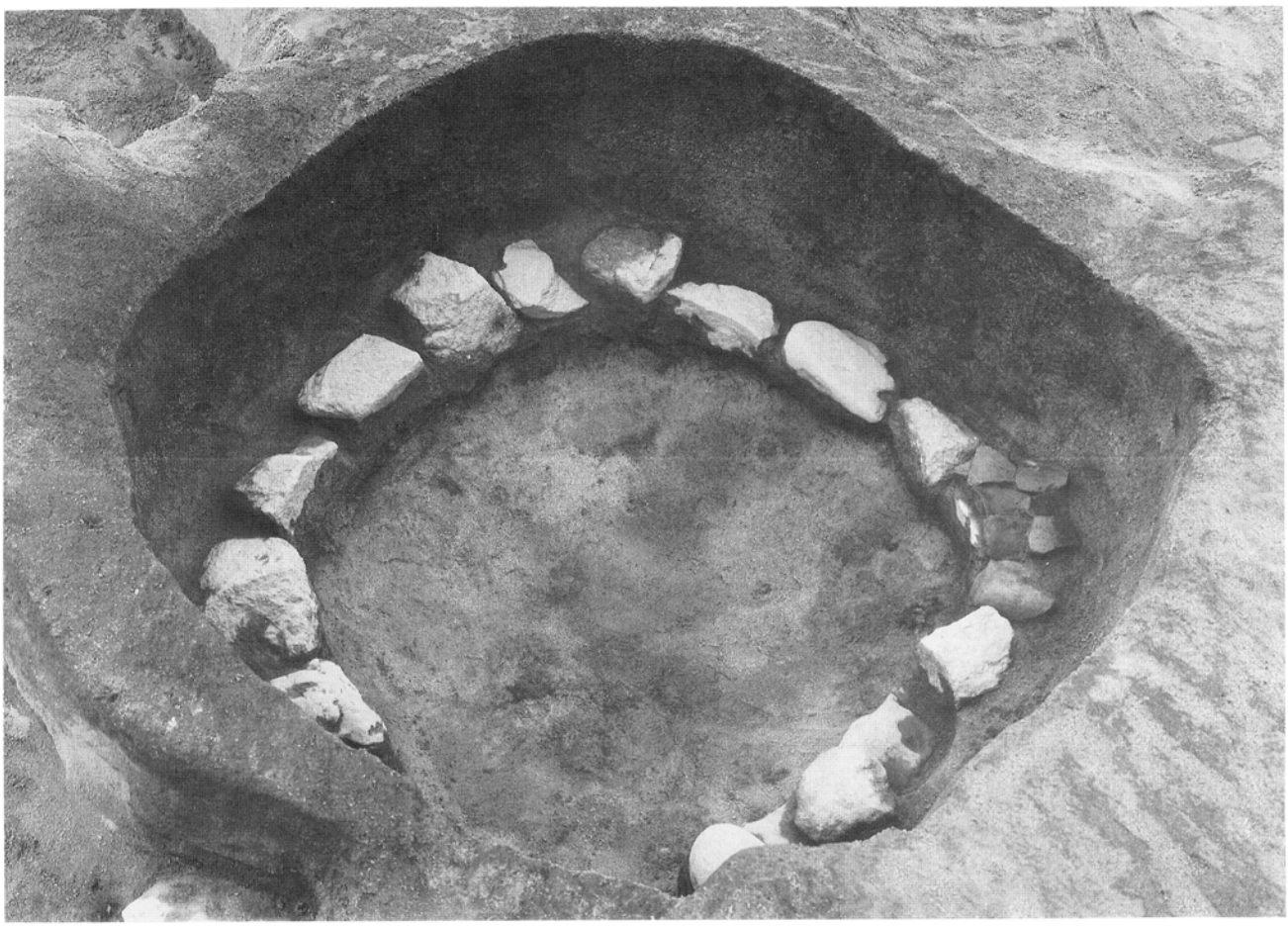
（1）第６次調査区東半区（南から）

（2）西半区（南から）

（1）溝１下層（東から）

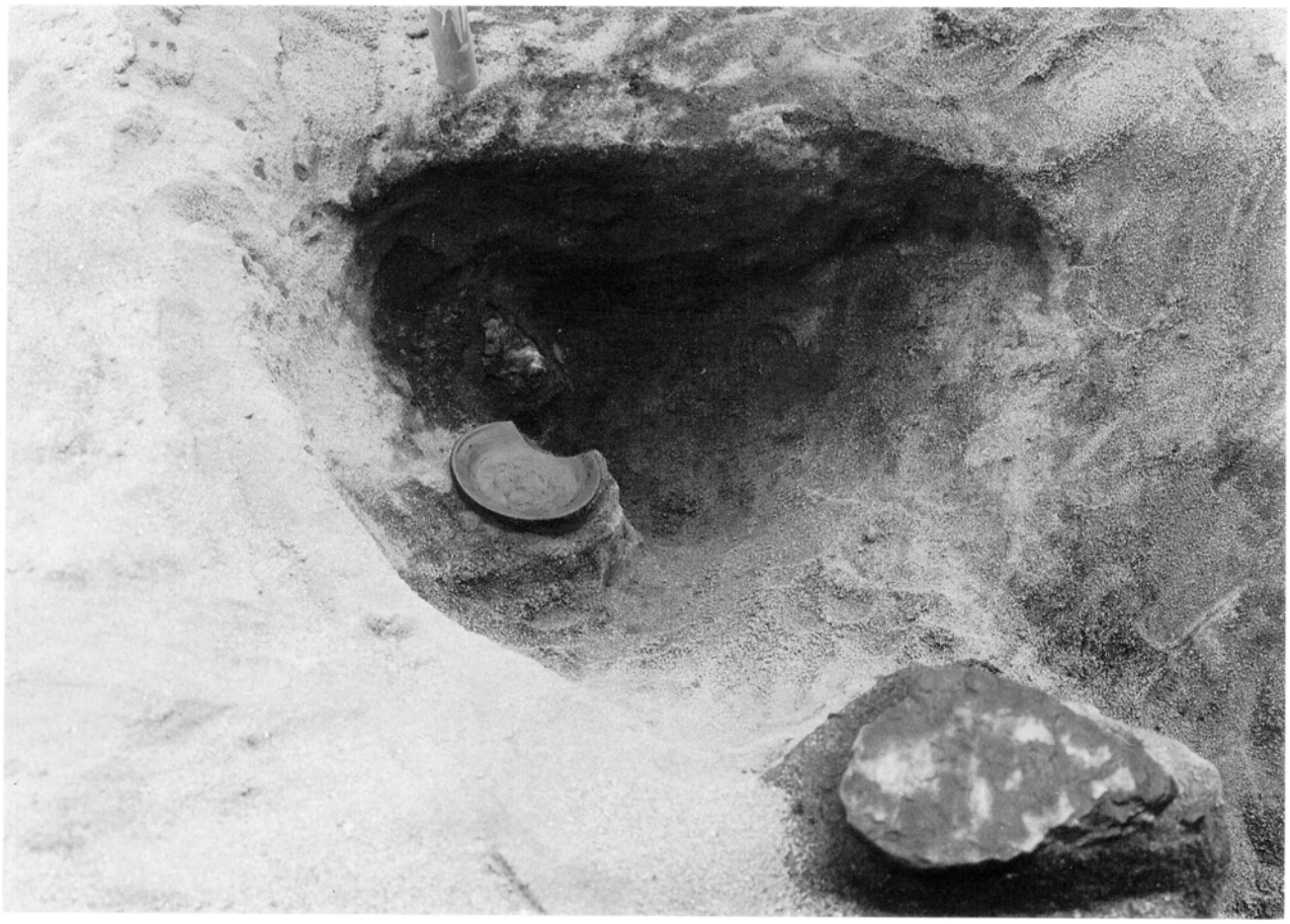
（2）溝２下層（南から）

（１）土壙18（西から）



（２）土壙25（西から）

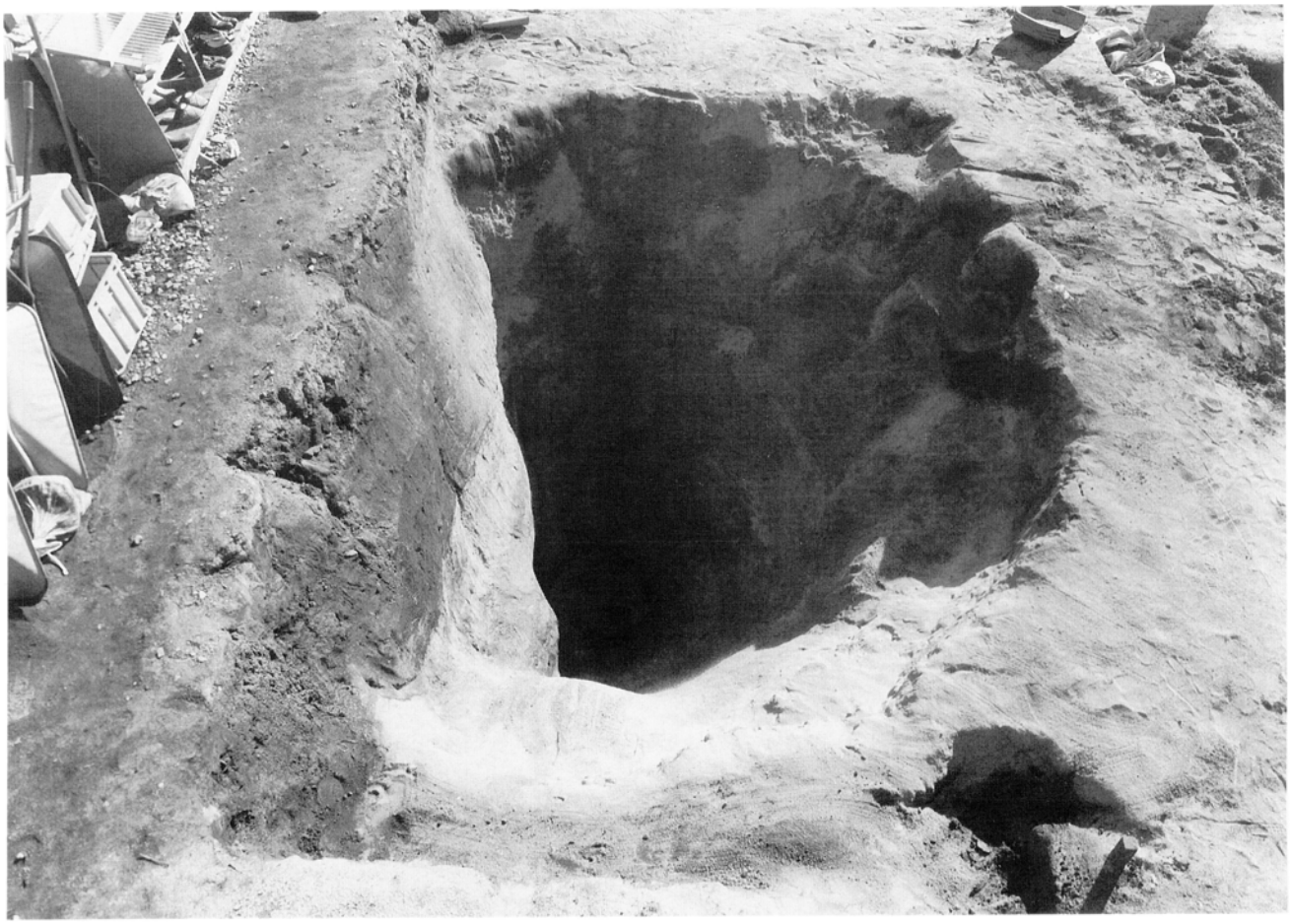
（１）土壙34（北から）



（２）土壙42（東から）

（１）井戸107土層（西から）

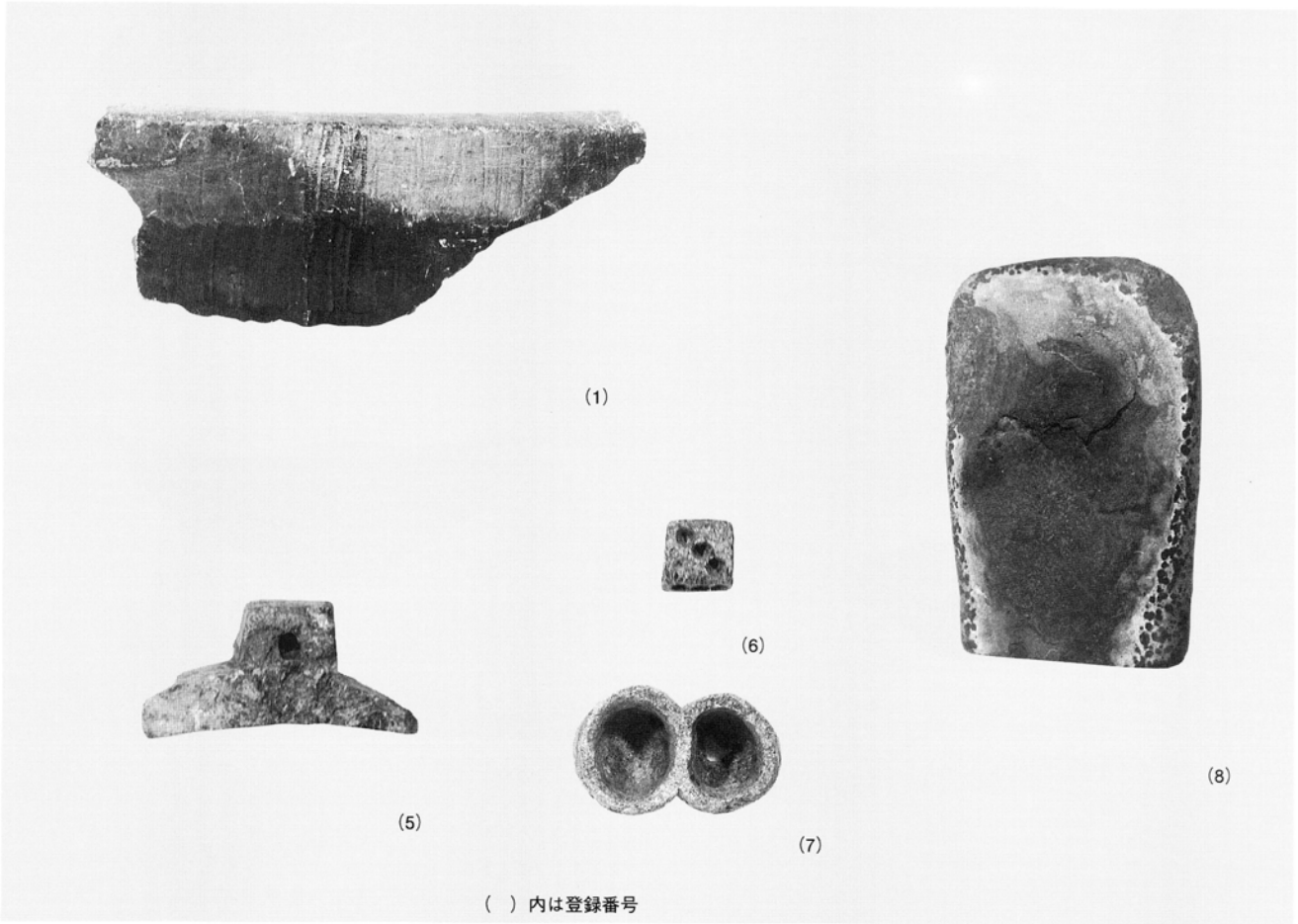
（２）井戸107（東から）



（１）井戸120（西から）

（２）井戸120井筒（西から）

（１）土壙108（西から）

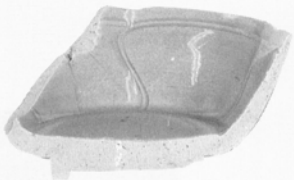


（２）出土遺物１

(21)

(57)

(89)



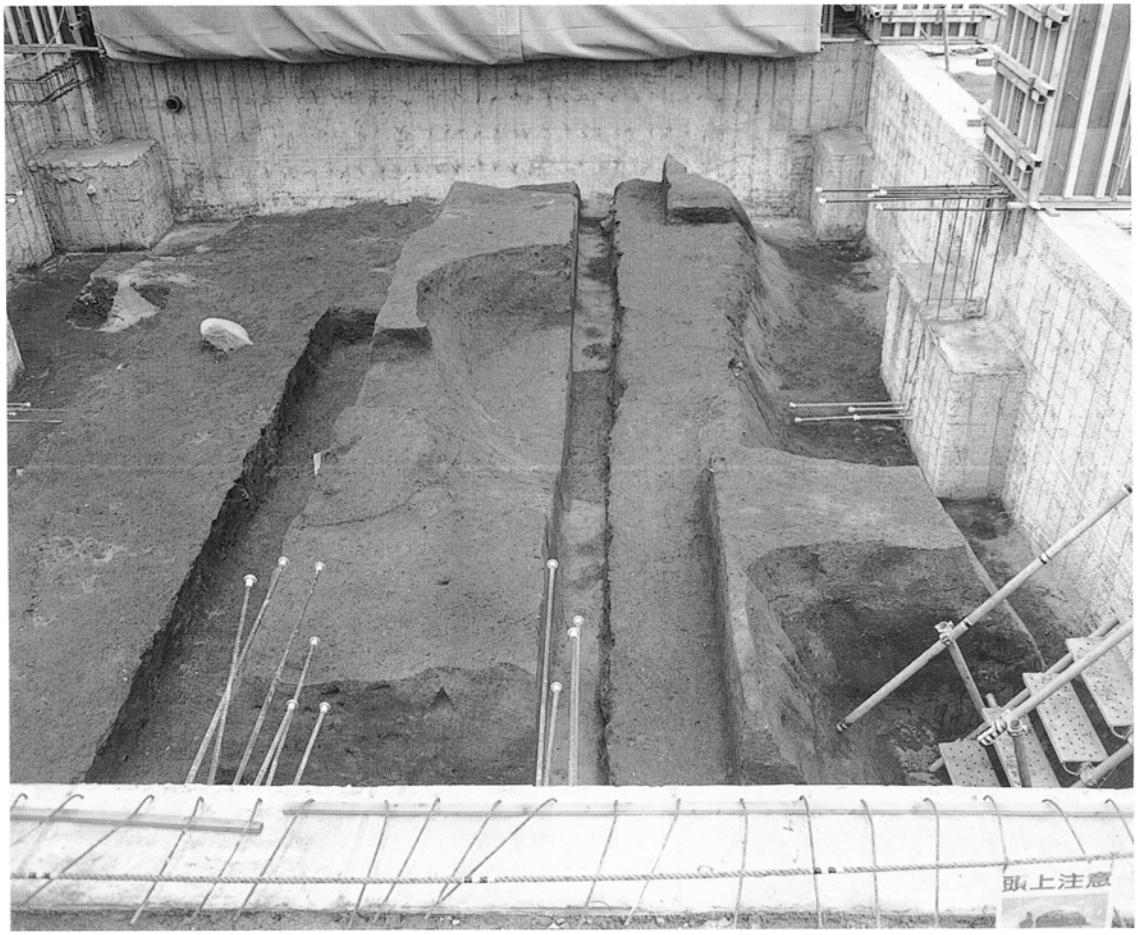
(77)

(68)

(51)

出土遺物

（　）内は登録番号



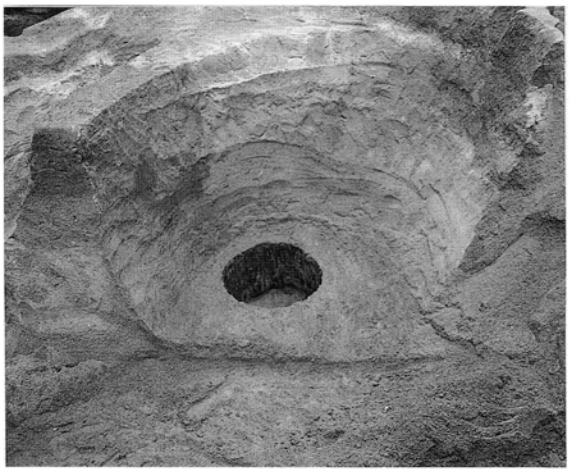
1） 7次第1面検出状況（南西から）

2） 7次第2面調査区全景（南西から）

1）ＳＫ－01人骨出土状況（南東から）

2）人骨取り上げ後残存状況

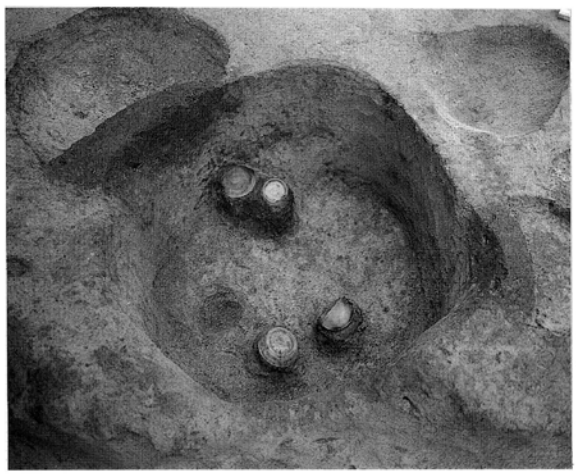
1）ＳＥ－01、ＳＫ－01掘削状況（南東から）



2）ＳＥ－02完掘状況（北西から）

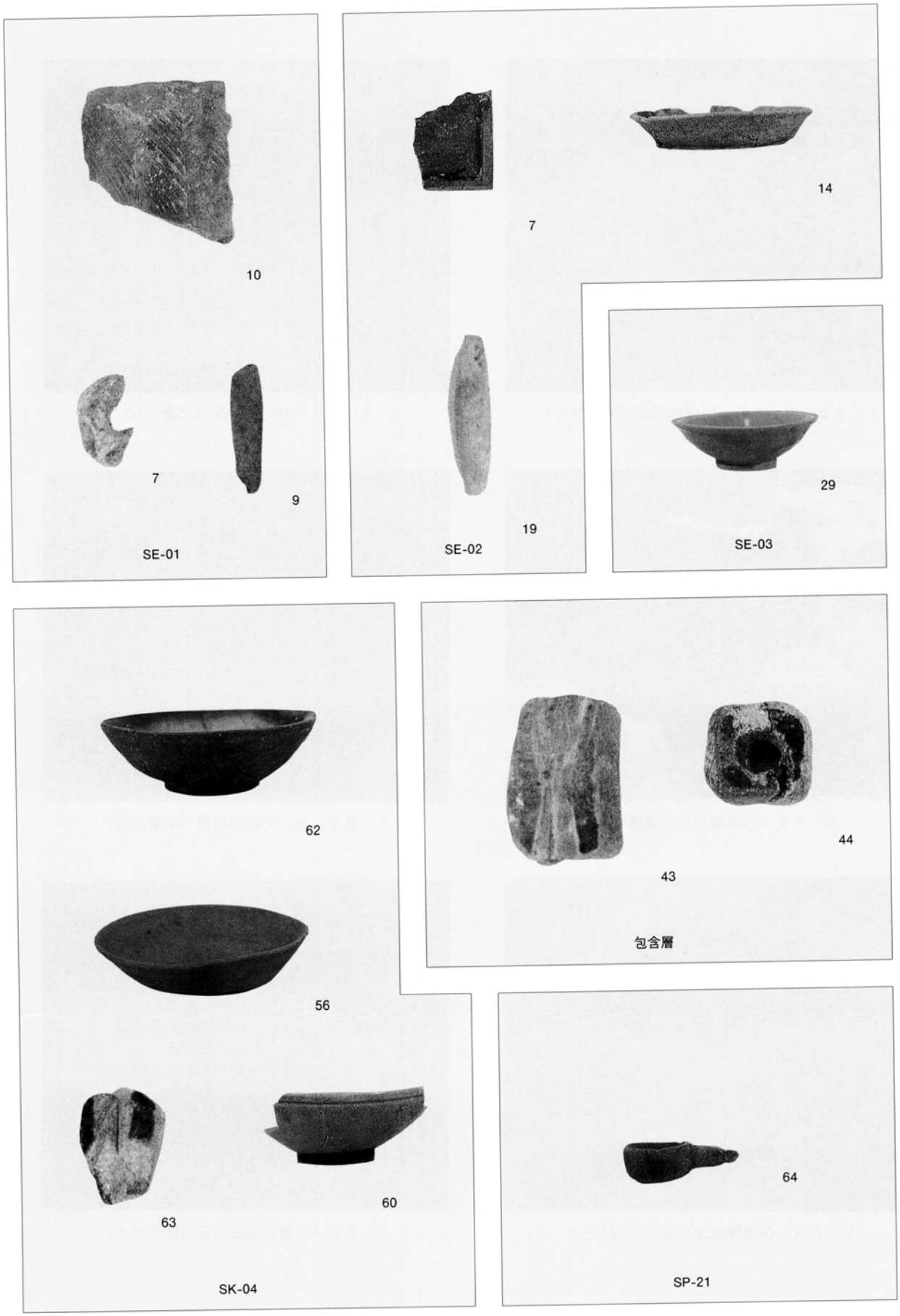
3）ＳＥ－03完掘状況（北西から）

4）ＳＥ－04、05完掘状況（南東から）



5）ＳＫ－04遺物出土状況（北西から）

6）ＳＰ－21遺物出土状況（南西から）



出土遺物

箱　崎　4

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第459集

1996（平成８年）３月31日

発　行　福　岡　市　教　育　委　員　会

福岡市中央区天神１丁目8-1

印　刷　慶　和　印　刷　株　式　会　社

福岡市博多区東那珂１丁目15-１